
ぼくとFクラスと召喚獣

神龍㐂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくとFクラスと召喚獣

【Nコード】

N3049W

【作者名】

神龍三

【あらすじ】

文月学園に通うことになった主人公【影月 久遠】は、Fクラスに入るようになった。

文月学園には、幼馴染の木下優子、木下秀吉がいた。

この学校で久遠がどのような動きを見せるのか

この作品は不定期更新です

キャラ設定 + 追記

カゲツキ
影月 久遠

(男)

身長 178 cm 体重 57 kg

赤髪 赤眼

趣味 音楽鑑賞 ギター 野球

得意科目 日本史 世界史 英語W 苦手科目 生物

日本史と世界史は700点オーバー 英語と化学は400越えるか
こえないぐらい 後は、320ちよつと。

総合科目 4000点越えるか越えないくらい

Fクラス所属

振り分け試験を受けていないのでFクラス

木下姉妹と知り合いで、小学校4年生の時に北海道に引っ越し。

高校2年生になって帰ってきた。時間帯は、Dクラス戦が終わって、

Bクラスに宣戦布告する日に転校してきた。

模擬刀を所持している。

FFF団を10分以内で倒すことができる

よっぱどなことでないとならないが、怒ったら口調が変わったり、
その相手なら容赦がなくなる。

召喚獣

デフォルト 本人を小さくしたようなもの

武器 太刀 サブマシンガン

服装 軍人的な感じ

腕輪 雷一閃

効果 雷を宿した太刀で敵を切り裂く

消費点数 40点

広範囲の場合 4体で150点

キャラ設定＋追記（後書き）

不定期更新ですが暖かく見守ってくれると嬉しいです

予習問題 プロローグ

「優ちゃん、秀くん。」

僕は、双子の姉弟に言わなければいけないことがあった。

「どうしたの（じゃ）久遠くん？」

二人は不思議そうに僕の顔を覗いてきた

「僕ね、来週から北海道に行くことになったの」

「えっ？」

「だからね、少しの間お別れになっちゃうんだ」

秀くんは泣きだしていたが、姉の優ちゃんは、いまにも、泣き出し
そんな顔で話していく

「久遠くん？」

「どうしたの？優ちゃん」

「いつぐらいまで、あっちにいるの？」

「わかんないよ。でも、絶対、帰ってくるからね！」

「絶対だよ？」

「うん、絶対にわすれない。優ちゃん、これ持っててくれない？」

「これは？」

「僕の宝物のハーモニカ。帰ってきたら秀くんと一緒にこれを渡し
てくれないかな？」

「分かった。秀吉もわかった？」

「うん、わかったのじゃ」

秀くんは泣きながら返事をしてくれた

そして一週間後

「僕、そろそろ行くね。そのハーモニカ頼んだよ？優ちゃん、秀くん」

「絶対帰ってきてよ。それまでこれを大切にするから！」

「向こうでもがんばるんじゃないぞ？久遠くんなら大丈夫だと思うが」

「うん！」

それじゃ、時間だから行くね？

バイバイ」

「絶対、帰ってきてよ！」

「分かった！！」

僕と優ちゃんと秀くんの少しのようで長い別れ

第一問

僕は、予定より少し遅れたけど日本に帰ってきていた

「久しぶりだな」

「ホントね、あの子たち元気にしてるかしら？」

僕に話してきたのは母さん

僕は、小さい時に父さんを亡くし、母子家庭だった。

母さんは一人で、僕を育ててくれて、それでもって仕事をこなしていたから、僕は母さんを凄く尊敬してるけど、母さんの前じゃ恥ずかしくて言えないよね

今年の母の日、何あげよっかな

「ここか」 案外大きいね二人じゃ少し広くない？」

「なに言ってるの？優子ちゃんと秀吉くんが来たりするじゃないの？」

「まあ、そうだね」

「長旅で疲れたでしょ？明日学校だから寝なさいよ？」

「うん、わかった」

それじゃ、寝るね おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

僕は、疲れて布団に入るとすぐに眠りに着くことができた

翌日

「ふあゝ、おはよう母さん。」

「おはよう、久遠、手続きとかあるから早めにでなさいよ？」

「うん、分かった」

いい天気だね」

僕は、新しい学校生活を想像しながら登校していた。

学校が見えくるとものすごく『漢』とゆう漢字が似合いそうな男性が立っていた。

「ん？お前が影月か？」

「僕が、影月 久遠ですよろしくおねがいます。 ええーつと・・

」

「西村だ西村宗一」

「はい、宜しく願います西村先生」

「お前は、振り分け試験を受けてなくてFクラスだがいいのか？」

「と、いいますと？」

「バカの集まりだ、お前の成績ならAかBにはいけるぞ？」

「別に、いいですよ、たのしく学園生活が送れそうじゃないですか」

「お前がそうゆうのなら構わない

職員室に行くぞ」

「はい」

僕は、担任の福原 慎先生（さつき自己紹介を済ました）に案内されながら、Fクラスに着いた

「では、少しまっていてください」

「はい」

僕はドキドキしていた転校は慣れないものだね！

教室内

「ええ、みなさんにお知らせがあります

転校生がいます」

『『『何 ……！！！？それは男ですか女ですか』』』

「男です」

『『男かよ!』』』

「では、入ってきてください」

久遠side

色々な叫び声が聞こえてきた
びっくりしたなあ

「では、入ってきてください」

よし、頑張るよ!

僕の高校生活!!

僕は、古い扉を開けて入って行った

チヨークを持ち、名前を書いて振り向いて

「僕は、影月 久遠です。趣味は音楽鑑賞と料理です。宜しく願
いします」

僕は、あたりを見渡し知ってる顔があつた
少し動揺したけど

「あ、久しぶり秀くん。やっと帰ってこれたよ」

「お主、や、やっぱりあの久遠かの?」

「そうだよ、6年前にわかれた久遠だよ」

僕は、そう言うと、秀くんが泣きながら抱きついてきた。
「ずっとずっとあいたかったのじゃあ

そうじゃ、今から、姉上の所に行かなければ!いくぞ久遠!」

「ちよ、ちよつとまって秀くん。優ちゃんもいるの?」

「あたりまえじゃ!」

へえ、優ちゃんもいるのか早く会いたいな
いいこと考えた!!

「秀くん、ばくに考えがあるから、昼休みにしない?」

「むう、久遠がそう言うのなら構わんが」

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『宜しい。これより 21F 異端審問会を開催する！』

『罪状を読みたまえ』

ちよつとまつて、感動の再会邪魔しないで。てゆうか、その覆面怖
いよ！

『は。須川会長』

『えー、被告、影月 久遠（以下この者を甲とする）は我が文月学
園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑
いがある。甲の罪状は背信行為、および第三の性別『秀吉』といち
やいちやしていました今後、甲とその『秀吉』の関係に対して充分
な調査を行った後、甲に然るべき対応を――』

『御託はいい。結論だけ述べたまえ。』

『イチャイチャしていたので羨ましいであります！』

『うむ。実にわかりやすい報告だ。』

『ええ！？秀吉男でしょ！？』

第三の性別って何！？』

『うるさい、お前には制裁を加えてやろう』

『仕方ない、本気を出すよ』

10分後、屍が山積みになっていた。

第二問

今は昼休み、僕はカバンから弁当を取りだしたところに

赤髪でツンツン頭で筋肉が引き締まっている男子に声をかけられた

「おい、影月」

「ん？なんか用？ええっと」

「悪い、俺はFここの代表の坂本 雄二だ。代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。」

「それじゃ、雄二でいい？」

「ああ、じゃあ俺も、久遠って呼ぶ」

「うん、いいよ。で、ぼくに何か用？」

「ああ、俺たちと昼飯くわねえか？」

「いいよ、でも食べ終わったら、すぐに出て行っている？」

「どうしてだ？」

「うう、この空気がいやだな」

「Aクラスに用事があるからね」

「久遠は、姉上に会いに行くから行かしてあげてほしいのじゃ」

「そっか、分かった。よし、久遠、時間も少ないしちよい急ぎ足で行くか？」

「うん！」

雄二の後についていくと先客が4人いた。

その人たちも、秀くんと雄二とは仲がいいようで、自己紹介をしてもらった。

そして、昼食を食べ終わると、秀くんと一緒にAクラスに行った

「久遠、わしはここまでじゃ、じゃから、後は頑張るのじゃ」

「あはは、秀くん頑張れって大袈裟だよ。」

じゃ、行ってくるね」

「うむ！」

教室のドアを開けるとボーイッシュな女の子に声をかけた

「あ、その人、ちよつといい？」

「ん？ボクに、なんか用？」

「木下優子さんどこかな？」

「優子と知り合い？」

「えつと、昔、転校して、戻ってきたから挨拶を」

「へえ、じゃ、こつちにきてー」

さあて、どうやって優ちゃんを驚かすかな？

あ、秀くんもドアから覗いてる

ちよつと、にやけてるのがむかつくな

あ、いたいた。

勉強してるのかな？

「木下優子さんちよつと話があるんだけどいいかな？」

「ちよつと待って、今、忙しいから。」

「へえ、そーゆーこと言うんだ。せつかく6年ぶりの再会なのに」

「それ、どうゆう・・・い・・・み？」

優ちゃんは勢いよく首を上げてぼくの顔をみて驚いている

「く・・・おん？」

「そ、帰ってきたよ」

優ちゃんは泣きだし

「やっと、やっと帰ってきた。連絡ぐらいよこしてよ、久遠」

「ごめんね、驚かしたかったから・・・！！！！？？」

ぼくが言い終わると同時に優ちゃんが抱きついてきた

「もう、どこにもいかないでよ？」

「うん、ぼくはずっと優ちゃんから離れないよ。」

ぼくは、優ちゃんの頭を撫でていた。

Aクラスみんなは泣いてる人もいた。

ボーイッシュな女の子も泣いていたし、秀くんが登場してきた

「よかったのう、姉上。」

「うん、ホントによかった。」

優ちゃんも泣き終わり

秀くんと、話していた

「あ、そうだ久遠、今日の夜、家に来てよ」

「分かった〜じゃあ、またね〜」

ぼくは、夜に優ちゃんの家に行くことを約束し、教室に帰った

Aクラスからの帰り道

「秀くん」

「どうしたのじゃ、急に!？」

「ぼく、なんか告白するような言葉言っちゃったよどうしよ?」

「うるたえるでない、姉上は多分気づいておらん!」

「だよね、だよね?大丈夫だよね?」

「大丈夫じゃ・・・・・・多分」

「ちよつとそりゃないよ〜」

ぼくは半泣き状態で秀くんに抗議していた

第二問（後書き）

誤字脱字感想などがありましたら言ってください

第三問

夜になり、ぼくは木下家の前に来ていた。

ピンポン

「はい、どちら様ですか？」

「影月ですけどー」

「あ、久遠来たんだ、今開けるから待ってて」
「うん」

廊下が走る音がして、玄関のドアが開いた

「久遠、上がって」

「ありがとー」

久しぶりの木下家は、心地よいものだった

「おお、久遠来たのじゃな」

「うん、優ちゃんとの約束だからね」

「母上、久遠が来たのじゃ！」

「え？ホント？あ、久遠ちゃん久しぶりね」

「お久しぶりです」

優ちゃんと秀くんのお母さんはまだまだ若かった
(全然、変わってないな)

「秀吉、あれ持ってきた？」

「あ、忘れたのじゃ、今すぐ取ってくるのじゃ」

「もう、しつかりしなさいよね」

「面目ないのじゃ」

秀くんがそう言い、階段を上っていく

「ちょっとまってて」

「何かあるの？」

「それは言えないわね」

「姉上、ちょっと来てほしいのじゃ」

秀くんは二階から優ちゃんに声をかける

「分かった、すぐ行く」

優ちゃんも2階に上がった

「「久遠」」

2人の声が重なる

「どうしたの？」

ぼくは、後ろを振り向くと

「「おかえり（なのじゃ）」」

そこには、ぼくの宝物の『ハーモニカ』があった。

「うん、ただいま」

ぼくは、受け取りながら涙を流した

「どうしたのじゃ!？」

「うん、嬉しくてついね。」

これを、ふたりに預けといてよかったよ、ホントに
ぼくは涙を拭きながら言った

「ねえ、久遠、久しぶりにそれを聞かしてくれない？」

「うん、それじゃ言うもの場所にいこっか」

いつもの場所とゆうのは
木下家のベランダである

久遠 s i d e

ぼくは、優ちゃんと秀くんと一緒にベランダの上にいた
ぼくは、久しぶりにハーモニカを吹き始めた
懐かしい感覚

ハーモニカがぼくをずっと待っていてくれたような気がした

吹き終わると優ちゃんがぼくの肩の上に頭を乗せ眠っていた

久遠 s i d e o u t

優子 s i d e

アタシと秀吉は久遠が帰ってきたことに喜び、久遠から預かってた
ハーモニカを渡し、1曲聴くことになった。

久遠は、吹き始めると、目を閉じ、ハーモニカに溶け込んでいった。

メロディーは優しく温かくそれで懐かしい音色だった

アタシは心地がよく吹いている久遠に身を預けるように意識を飛ばした

優子 s i d e o u t

「優ちゃん、寝ちゃったね」

「そうじゃの、久しぶりにお主のハーモニカが聞けて、嬉しかった
んじゃろ」

「そうだったのかな、そうだったから嬉しいな」

「うむ、そうじゃろな」

「じゃあ、ぼくは優ちゃんをベッドに寝かせてくるね」

「わかったのじゃ」

ぼくは優ちゃんを抱えベランダを後にし、優ちゃんの部屋に入ったのだが

「……………この、荒れようは何？」

ぼくは、そうつぶやき優ちゃんをベッドに寝かせた

「うう、久遠……………おか……………えり」

優ちゃんの寝言が聞こえた

「ただいま」

とぼくは言い

顔にキスをした

第三問（後書き）

次は、Bクラス戦に入ろうと思います
駄文ですがよろしくお願いします

第四問 開戦Bクラス!!

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日は午前中がテストで、さっき全科目が終わり、昼飯を取ったところだ。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺るいきは充分か?」

『『『『おおーっ!』『』『』』』』

一向に下がらないモチベーション。他のクラスにはない、唯一の武器だろう。

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『『『『おおーっ!』『』『』』』』

「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い!」

『『『『うおおーっ!』『』『』』』』

姫路さんと戦えることで、更に士気を増すFクラスの人たち。

ばくも、初参戦だしやる気出さないとね

「影月君、どうしたんですかうれしそうですけど」

「やっと、戦争ができるからね。楽しみなんだ」

「そうなんですか、がんばりましょうね」

「そうだね!」

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

Bクラス戦の開始。

「よし、いつて来い！目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！』』』

ぼくは、先陣を切り走り出す。

「いたよ、Bクラス！」

「高橋先生を連れてるぞ！」

人数は10人ほどか皆と協力するとして、ぼくは3人ほど倒したいな。

「生かして帰すなっ！」

物騒な台詞を吐き捨てながらBクラス戦が開戦した。

「Bクラス里井に物理で勝負を挑みます！」

『Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 影月 久遠』

『 152点 VS 330点 』

「里井、俺も参戦するぜ」

『Bクラス 野中長男』

140点』

「行くわよ！！」

里井さんが突っ込んできて、それを刀カードして、片手でサブマシンガンを打ちこんだ

『里井真由子 0点』

「戦死者は補習！！」

西村先生が登場し、里井さんを連れて行った

ぼくは、びっくりして少し固まったけど、それ以上にかたまっていた野中の召喚獣の首を飛ばした。

「野中長男 0点」

野中も連れて行かれた

「明久、コツとかないの？」

「うーん、感覚？」

「もういい、聞いたほうがバカだったよ」

「ひどい！？」

姫路さんも奮戦して、Bクラスの動揺を誘うことに成功。

「久遠、明久、ワシらは一旦、教室にもどるぞ」

「ん？なんで？」

ぼくも、そう思う。

「Bクラスの代表じゃが・・・」

「うん」

「あの根本らしい」

「根本って、あの根本恭二？」

「根本ってだれ？」

明久曰く、

テストではカンニングが当たり前

目的のためには手段を選ばず、球技大会で『一服盛ったらしい』
喧嘩には、ナイフが通常装備
らしい

「確かに、卑怯だね。」

「これなら、なにかあってもおかしくはないね」

「うむ、それでは戻るとするかの」

教室に戻るとそこにはひどい惨状だった・・・

折れたシャーペン、粉々の消しゴム、そして穴だらけの卓袱台

雄二も戻ってきて、Bクラスとの協定の話にぼくは疑問を感じた

「雄二、戦争に関わることで、作戦会議とかも入るの？はいつた
らまずくない？」

「っ！、そうゆうことか」

「え？何どうゆうこと？」

「明久、ここはどこだ？」

「どこって、ここは学校だよ？」

「それじゃあ、学校とは、何をするとこだ？」

「もちろん、勉強・・・ってそうゆうことか！」

「やっと、分かったんだ」

ぼくらは、戦線に戻り戦った

そして休戦の時間になり教室に戻った

「・・・・・・・・（チョンチョン）」

「お、ムツリーニか」

「・・・・・・・・Cクラスの動きが怪しい」

「漁夫の利を狙うつもりだね、いやらしいよ」

「雄二どうするの？」

「協定の事もあるけど・・・」

「とりあえず、Cクラスに不可侵条約を結びに行くか」

「雄二がそれでいいならいいよ」

「うむ、それでは行くとするかの」

「秀吉は、ここに残っててくれ」

「ん？なんじゃ？わしは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると万が一やろうとしている作戦に支障が出るのでな」

「よくわからんが、雄二がそう言うのなら従おう」

（秀くんの顔を見せてくなくて、作戦？ってまさか・・・）

「おい、久遠おいてくぞ」

「あ、まって今行くから」

ぼくが考え事をしてるうちに、島田さんと須川増えて、Cクラスまで来た

「Fクラス代表の坂本だ。ここの代表はいるか？」

「私だけど、何か用かしら？」

「不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・どうしよつか？根本君？まじか！？」

「当然却下。だって必要ないだろ？」

「なっ！？どうして根本君がここに！？」

奥から、現れたのは、卑怯者の根本らしい

「とりあえず、雄二は逃げて！ここはぼくと明久で何とかするから！！」

「すまねえな恩に着る」

「明久、準備はいい？」

「いつでもいいよ。」

「じゃ、死地にいこっか！」

「うん！！」

ぼくと明久のタッグ戦が始まった

第五問

ぼくと明久対Bクラス10名

「Fクラス影月がここにいる10人に挑みます！『試獣召喚^{サモン}』」

影月久遠 数学 450点 吉井明久 数学63点

「今回は今までにないくらい良かったからね！さあ、かかってきなよ！ー！」

「なめやがって！『試獣召喚^{サモン}！』」

Bクラス合計 1200 点

ぼくは、目を瞑った

「はっ！怖気づいたか！？」

「雷一閃！！」

ぼくが、目を開けると同時に、4体の召喚獣が消えたその瞬間に根本がにげたけど、ぼくと明久ですべて撃退した

「明久、教室に戻ろう・・・か？」

ぼくは、極度に集中力を使いそのまま倒れてしまった

「あれ？知らない天井」

「保健室よ」

「あれ？なんで優ちゃんがいるの？」

「秀吉が教えてくれたのよ」

「そっか、ごめんね心配かけちゃって・・・」

「別に、いいわよ。それより大丈夫？」

「うん、もう平気」

「そ、そっか（あの笑顔は卑怯なのよ！）／／／」

外に出ると、もう夜になっていて優ちゃんを家まで送り、家に帰った

次の日

「おはよー」

「おはよー、久遠もう大丈夫なの？」

「うん、ヘーキヘーキ心配かけてごめんね？」

「いいよ、別にー」

結局、今日に持ち越しになり、朝から戦争だ

「昨日言ってた、作戦を実行する」

雄二は開口一番に言った。

「作戦？まだ、開戦時間じゃないよ？」

明久は疑問を素直にぶつけるけど、ぼくは、ある程度は予測できてた

「Bクラスじゃない、相手はCクラスだ」

「なるほど、で、何すんの？」

「秀吉にはこいつを着てもらおう」

ぼくの予測が確信に変わった時であった
でもさ、雄二、どうやって手に入れたの？

それを持つてただけで軽く引いたよ

「それは、別にかまわんが、ワシが女装して、どうするのじゃ？」

構おうよ秀くん、もしかしたら、命がなくなるかもしれないんだよ？

「秀吉には、木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう

とゆうわけで用意してくれ」

「う、うむ・・・」

「秀くん、やりすぎたら、ダメだからね？」

「ハッハッハ、任しておれ。」

不安にいっぱい仕方ないのですが・・・

そんなこんなでCクラス前

「ここからは、秀吉、一人で頼むぞ」

「気が進まんのう・・・」

秀くんはなんか嫌そうな顔をしていた

Cクラスの前で大きく深呼吸

勢いよく扉を開けて・・・

『静かにしなさい、この薄汚い豚共！』

終わった、秀くんが死ぬ・・・

『な、何よアンタ！』

『話しかけないで、豚臭いわ！』

矛盾してる気がします・・・

突っ込んだら負けだよね・・・

ハア・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数がいいからっていい気になるんじゃないわよ！なんの用よ！』

代表さんが単純のバカで短期で助かった！

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！？言うに事欠いて私達はFクラスがお似合いですって！？』

Fクラスは豚小屋じゃない！

『手が穢れてしまうのは本当は嫌だけど、特別にあなた達のを相應しい教室に送ってあげようと思うの』

ちようど、試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきな。近いうちに私達が薄汚い貴方達に始末してあげるから！』

秀くんはドアを閉めて帰ってくるけど、ものすごくすっきりしたようだった

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」
秀くんの指示が飛ぶ

雄二は『教室に閉じ込める』と言った
でも、姫路さんの様子がおかしい
本来は総司令官である彼女、でも、全く役割を果たしていない

明久が、姫路さんに話しかけるけど『何もないです』の一点張り

「右側入口数学から、現国に変更されました」

「数学はどうした！」

「Bクラスに拉致られて模様」

右側では大きく揺らいだ！

「わ、私が行きます！」

姫路さんが駆け出した。が、すぐに立ち止まった

視線の先には、根本くんのでにある手紙

そうか、そうゆうことが・・・

完璧にオレ（・・・）を怒らしたな、根本！

明久は、姫路に休めと言い、教室に戻り、オレはその後を追う

「おい、明久、待てオレも行く」

「えっ！？、久遠なんか全然雰囲気が違うんだけど！」

「んな事はかんけねえ」

「で、どうすんだ？」

「根本のやるーをぶっ飛ばす！！」

「その息だ明久、オレを怒らしたこと後悔させてやる！！」

第五問（後書き）

久遠の口調を少し変えてみました。

第六問戦争終結

「雄二」

「ん？どうした？脱走か？そうならチヨキでシバクぞ」

「冗談はいい、話を聞け」

「久遠がその態度だと何かあったのか？」

「ああ、姫路を戦線から外せ、理由は明久に言わす」

「明久言ってみろ。」

「根本君の着てる制服が欲しいんだ」

「お前にいったい何があつたんだ？」

「お前、ホントバカだな」

「ああ、いやえつとその・・・」

「知らなかった、ここまでバカだとわ・・・」

「まあ、いいだろう勝利の暁にはそれくらい何とかしてやるう
いいのかよ！

「で、姫路を外す理由は？どうしてもじゃないといけないか？」

「うん、理由は言えないけど・・・」

「雄二、頼むオレからもお願いだ」

「わかった・・・ただし条件がある？」

「・・・条件？」

「姫路が担う予定だった任務をお前がやれ。どうやってもいいから
なす成功させる」

「やってみせる！いや、やってやる！！」

「良い返事だ、で久遠お前は・・・」
「わかってる、死ぬ気で止める
だろ？」

「ああ」

「大丈夫さ、あいつにはオレを久しぶりに怒らしたからなボコボコにやってやる」

「明久」

「どうしたの、雄二？」

「お前はたしかに点数は低い。でもな秀吉やムツリーニのように、お前にも秀ている部分がある。だからお前を信頼している」

「・・・雄二」

「うまくやれ、計画に変更はない」

歩きながら、明久は考えていたが、閃いた顔をしていた。
オレはこの時勝つ確信が湧くのであった。

「秀吉、大丈夫か？」

「く、久遠？お主、きれておるのか？」

「ああ、今まで以上に最高にきれてるさ。おかげで根本のくそやろーをぶっ倒すことができそうだからな」

「・・・無茶はするでないぞ」

「わかってるさ」

秀吉 side

わしは、久遠の雰囲気、口調があの時とまったく一緒だったときに少し怖かったが、まだ、平常心を少し残っておるみたいで安心したこの勝負なんとしてでも勝たねば！

S i d e o u t

雄二と根本のやり取りを見ながら、戦闘に入った俺は現国で戦闘に入った。今回は350点だが、相手もあいてで多い

雄二の作戦決行の合図の時には100点を切っていた。

Bクラスが押し出そうとするが、明久の奇襲それを守る近衛兵に阻まれるが、今度はムツリー二の奇襲、保健体育の勝負でムツリー二が勝ち、Bクラス戦は終了した。

「秀吉、教室に戻るぞ」

「どうしたのじゃ？」

「いいから、早くしろ」

秀吉を急かし、Fクラスに着いた

「秀吉このこと誰にも言うな」

「なんの事じゃ？」

「今から、少しの間気を失うが寝てるとだけ言ってくれ」

「な、なぜ気を失うのじゃ！？」

「俺にもわからん・・・ねえ・・・」

オレを気を失った

ぼくが目を覚ますと優ちゃんの顔があった

「え？なんで優ちゃんがいるの！？」

「あんたは、戦争ごとに気絶しないと、気が済まないの？」

「なんで、知ってるの！？」

「秀吉にはかしたの」

「めんぼくない」

あれ？ここFクラスじゃない

「ねえ、ここどこ？」

「私の家だけど？」

「どうしてここに？」

「坂本くんが運んでくれた」

「まじ？」

「まじ」

「そ、それじゃ、ぼく帰るね」

ガッ（優ちゃんがぼくの肩をつかむ音）

「何か言うことは？」

「すみませんでしたー！！」

土下座までの時間0.5秒

もはや人間業じゃない

「まあいいけど、ご飯食べて行く？」

「母さんに電話しないと・・・」

「もうしといた」

「食べるのは確定なんですネ」

「そうゆうこと」

ぼくは木下家でご飯食べて帰り
風呂に入ってそのまま布団で眠った

第六問戦争終結（後書き）

グダグダですみません

第七問 久遠Aクラスに赴く

Bクラス戦翌日

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があつての事だ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」
「ぼくも、そう思うよ」

明日は嵐かな？

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「まだ、早いんじゃない？ Aクラス戦があるからね？」

「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！！」

雄二の宣言で、Fクラス全員が歓声を上げた。

「おおーっ！」

「そっだーっ！」

「勉強だけじゃないんだーっ！」

Dクラス、Bクラス相手に勝利した自信が、彼らを奮起させていた。全ては雄二のシナリオ通りに事が進んでいる事も、それを大いに助

長させている。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

ぼく達は既に聞かされてたけど、Fクラスのみんなには言ってないから驚いてる

「どついう事だ？」

「誰と誰が一騎打ちするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

当然、いきなりこんなことを言われれば、動揺するのも無理もない。だが雄二はそれに構わず、机をたたいて皆を鎮める。

「落ち着いてくれ、それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔子だ」

「バカな雄二が勝てるわけがあああ！！」

雄二の投げたカッター明久の頬をかすめた。

「次は耳だ」

どうやって、この人たち友達やってんだろう

謎だね！

「……まあ、その通りだ。まともにやり合えば勝ち目はないかもしれないが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？」

まともにやり合えば、俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない……俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

「「「おおおおー！ー！ー！」」」

信頼の証として、全員が雄たけびを上げた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争は、テストの点で雌雄を決する物である。

だからこそ、テストの点を用いた勝負であれば、方法次第では採用される。

「でも同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ 幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「雄二何かあるんでしょ？ 早く言っただけだよ」

「分かってる。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

確実に間違える問題。

それを聞いて、全員が静まった。

「その問題は……“大化の改新”！」

「大化の改新？ 誰が何をやったみたいなお問題、小学生でやったか？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純に年号を問う問題だ、その問題が出たら俺たちの勝ちだ」

明久、いつおこったか知ってるか？」

「なくようぐいすだから794年だね」

「ぼく、明久がここまで、バカだとは思わなかったよ・・・」

「ああ、オレも想像を越えてびっくりした」

「え、違うの？」

「違う！無事故の改新だから645年だ！

だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！ これは確かだ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！ はれてこの教室とはおさらばだって寸法だ！」

そこまで断言するあたり、信用する価値はある。

そう結論付けるには、十分な自信を持つ雄二の姿だった。

「あの、坂本君？」

「ん？ なんだ、姫路」

「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

それを聞いて、明久は訝しげに雄二を見た

「ああ、オレと翔子は幼馴染だ」

「総員ねえー！！」

Fクラス男子全員（ぼくと秀吉は除く）は上履きを持っていた
「なっ！？ 何故明久の号令で急に構える！？」

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様を殺す！！」

「俺が何をしたと！？」

雄二、この人たちに理屈は通じないよ？

明久は、「あの、吉井君？」

「ん？ 何、姫路さん？」

「吉井君は、木下さんや霧島さんが、好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし……えっ、どうして姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？ それと島田さん、どうして君は僕に向かってなんて危険な物を投げようとしてるの！？」とゆう状況

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！ そうしたら俺達の机は……」

「『システムデスクだ！』『』『』」

その傍らでは、テンションは最高潮だった。

「今から宣戦布告に行くぞ、ムッツリー二と秀吉も用意しろ」

「了解」

「わかったのじゃ」

Aクラスへしゅっぱーっ

第七問 久遠Aクラスに赴く（後書き）

誤字脱字感想等ありましたら言ってください

第八問 賭け！？（前書き）

木曜日から更新が遅れるかもしれません

第八問 賭け！？

「一騎打ち？」

「ああ、そうだ。FクラスはAクラス代表に一騎打ちを申し込む。」
雄二はもちろん明久に秀君など首脳陣が来ていた。

「何が目的？」

優等生の皮をかぶっている優ちゃん。

（ギロツ！）

すみませんでした！！

「もちろん、オレ達Fクラスの勝利だ」

優ちゃんが怪しむも当たり前だね

なんせ、最下位クラスがAクラス代表に一騎打ちを申し込んでるから。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」
「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって。昨日来ていたあの」

昨日何があったの！？

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまだされていらないようだ、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間

を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」
試召戦争の決まりである、準備期間。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もない B クラスだけじゃなくて、D クラスもな」

へえ、D クラスにも勝ったんだ・・・

雄二って戦争好きだね〜どうでもいいけど

「・・・それって脅迫？」

「いや、ただのお願いだよ」

優ちゃん、頑固だから長引くね、これ

ギロツ！

また睨まれた・・・

なんでわかるんだろう？

「何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

代表同士の対決だったら雄二に勝ち目があるとは思えないだろうか
らね

「え？本当？」

あまりにあっさり決まったからか、明久が驚いて声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん

」

だから、昨日なにがあつたの！？

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う」

やはり警戒されている

「なるほど。こっちから姫路か久遠が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし、久遠相手だと日本史や世界史どうなるかわからないからね」

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「一騎打ち五回か。結構いけそうだね。」

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズデ はあってもいいはずだ」

「え？うーん」

さすがに戦争の勝ち負けが係わって くる内容だけに悩んでいるようだ。

「 受けてもいい」

「「うわっ！」」

びっくりした〜！

「 雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「 その代わり、条件がある」

「条件だと？」

「・・・うん」

霧島さんはなぜか雄二を見た後、姫路さんをみて再び雄二を見る

「・・・負けた方は何でも一つ 言うことを聞く」

後ろで明久とムツツリー二がなにかやってたけど放っておこう・・・
「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

「ああいいぜ交渉成立だ」

「ゆ、ゆうじ何勝手に決めてるのさ！姫路さんが了承してないじゃないか！」

「大丈夫だ。姫路には迷惑はかけない」

「えっ？それってどうゆうこと？」

「さて、帰るぞ」

「無視！？」

明久を放っておいて出ようとするけど、優ちゃんに声をかけられた

「久遠」

「どうしたの？」

「えっと、賭けをしましょ」

「どんな賭け？」

「アタシとあんたが戦って、勝った方がなんでも言うことを利かせる」

「うん、いいけど？どうしたの急に？？」

「べ、別にいいじゃない／＼」

「うん、わかった。それじゃーね」

教室を出ると、絶対負けなさい！と聞こえたような気がした
さて、気を引き締めますか！

第八問 賭け！？（後書き）

誤字脱字感想等がありましたら言ってください

第九問

「では、両者準備はよろしいでしょうか？」

Aクラスの担任高橋先生が立会人である

「ああ」

「・・・・・・問題ない」

「それでは、一人目の方どうぞ」

高橋先生の声で雄二は明久に「本気を出してみろ」と言い、明久は「わかったよ」と答え前に出た

Aクラスからは佐藤さんが出てきて、ノリがいいのか素なのかわからなかったけど、Fクラスのバカ騒ぎにのり、明久の「左利きなんだ」とゆう訳のわからない言葉で開戦となり、瞬殺でやられた。

そのあと、島田さんに「利き腕は関係ないでしょ！」と言われながら関節技を決められていた

2人目は、ムッツリー二と工藤さん

「きみ、保健体育が得意なんだって？」

ボクも得意なんだよそれも君と違って・・・・・・実技でね」

「・・・・・・（ブシャー！！！！）」

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」
「優子の幼馴染の影月君だっけ？」
「そうだけど……」
「保健体育の授業やらない？もちろん実技でね」
「くっおっん!!」
「ちよつと待つて優ちゃん！」
「ぼくの関節はそっちに曲がら……ギャアアアア!!」
「……優子、やり過ぎ」
「へ？あ、ゴメン久遠！」
「うう、大丈夫だよ」

「早く始めてください」
「はい試獣^{サモン}召喚つと」
「……試獣^{サモン}召喚」

勝負は一瞬だった

『工藤愛子 VS 土屋康太
426点 526点』

ムツッリーニヤバいね（笑）

3人目は実質学年次席対決
姫路さんが霧島さんと並ぶような点数で久保を圧倒した！

「4人目来てください」
「ワシが行こう」
「いや、ぼくが行くよ」
「むっ、そうかなら譲ろう」
「ありがと」

「その前に、秀吉ちよつといい?」

プルプル

ぼくは震えていた

優ちゃんと秀くんが出て行ったあと

秀くんの叫び声が・・・

そのあと、帰り血を拭きながら優ちゃんが帰ってきた

「秀吉は急用ができたから帰るってさ

さ、始めましょ」

「教科は何にしますか?」

「優ちゃんが決めていいよ」

「そう?じゃあ、総合科目で」

今日2回目の総合科目か

「承認します」

魔法陣が現れ、ぼくと優ちゃんの召喚獣が姿を現す。

『Aクラス 木下 優子 4236点 VS Fクラス 影月

久遠 4236点』

「「「なっ!?学年主席レベルだと!?!」」」

驚きの声上がる

「は、始めてください」

高橋先生も驚きを隠せない様子

ぼくは、目を瞑り、全神経を召喚獣の方にやる。

空気の起動、気配、音すべてを把握して、優ちゃんの召喚獣の攻撃

を避け、カウンターを仕掛ける

『Aクラス 木下 優子 4021点 VS Fクラス 影月

久遠 4220点』

「なんで、目を瞑って攻撃ができるのよ！」

「・・・集中力」

「訳わかんない！」

「・・・空気の気道とかでわかる」

「じゃあ、これならどう!？」

優ちゃんの召喚獣はランスで切りかかるがそれを避けて、サブマシンガンを打ちこむ。

「雷一閃一瞬!!」

70点を消費して、一瞬に優ちゃんの召喚獣に切りこむ

が、これを受け止められて、そのまま、ランスに打ち込められる

「甘いわよ!」

「くっ!」

『Aクラス 木下 優子 3821点 VS Fクラス 影月

久遠 3573点』

「す、すげー、ハイレベルすぎるだろ!」

Aクラスの生徒が声を漏らす

その後も勝負はつづき、お互い2ケタになっていた

『Aクラス 木下 優子 81点 VS Fクラス 影月 久遠 80点』

「優ちゃんこれで決めるよ!」

「ええ、そうしましょ!」

ぼくは、サブマシンガンを捨て、太刀だけを握りしめた

「ハアアアッ!!」

ガチン!!

先に倒れたのは、ぼくの召喚獣だった

『Aクラス 木下 優子 4点 VS Fクラス 影月 久遠 0点』

会場が一気に湧くと同時にぼくはまた、気を失った……

「あれ?また、気を失ったの?」

「そうよ、アンタ、ホントに戦争ごとに気絶しないと気が済まないの?」

「うう、面目ない……」

「あんまり、心配させないですよ? (ボソッ)」

「えっ?」

「な、なんでもない! / / /」

「最後、どうなったの?」

「まだ、始まったばかりだよ」

「それじゃ、長時間気を失ってたわけじゃないんだ」

「まあね。それより動いていいの？」

「うん、大丈夫」

Aクラスに行かないと。

最後は、みんなと一緒にいたいし」

「そう、それじゃ行きましょ？」

保健室を出てAクラスに向かった

そこに映っていたのは

『Aクラス 霧島 翔子 日本史 97点 Fクラス 坂本雄二
53点』

Fクラスの卓袱台がミカン箱になった

第十問 帰り道で・・・

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ俺達に対する高橋先生の声。

ぼくたちは負けた

「・・・・・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・・・・・・殺せ」

雄二は床に座り込み、つぶやく

良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「そうだよ、明久！」

まずは、社会的に抹殺してそのあとを十分痛みつて「落ち着きなさいよ！」イデッ！！」

後ろから、優ちゃんの拳が降ってきた・・・

「ねえ雄二。0点なら名前の書き忘れとか考えられるけど、53点てのはやつぱり・・・」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

姫路さんと島田さんに抑えつけられながら、明久が叫ぶ

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

そして明久は大馬鹿だ。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路さんの説得でやっと落ち着く・・・

「・・・・・・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断してなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

「・・・・・・・・ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャカチャ！）」

そして撮影を始める康太。

「わかつている。何でも言え」

潔い雄二の返事。別にかっこよくはないけど…………

「…………それじゃー」

霧島さんが姫路さんに一度視線を送り、再び雄二に戻す。

「…………雄二、私と付き合って」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「…………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

大胆な告白！

雄二も知ってるなら、答えてあげなよ

「拒否権は？」

「…………ない。約束だから。今からデートに行く

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに……………」

ぐいつ　つかつかつか

霧島さんは雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「「「……………」」」

あまりの出来事に誰も言葉が出ず、教室にしばしの沈黙が訪れる

「Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

声ができる方に振り向くと、西村先生がいた

「なんで、鉄人が？」

鉄人ってあだ名か……

ぼくもそう、呼ぼつかな

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思ってな」

……我がFクラスとはどういう事だ？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「なにいつ！？」

ぼく以外の男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つだ。ないがしろにしているものじゃない」

西村先生と明久が会話してる間に出ようとするが……

「くーおーんー？
どこ行くのかな？」

「ギクギク」

見つかった

「な、何かな、優ちゃん？」

「約束覚えてるよね？」

やっぱり覚えてた！！

「も、もちろん覚えてるよ？」

「じゃあ、言うわよ？」

「う、うん（ドキドキ）」

「アタシと一緒に帰る？」

「へ？」

あれ、もつときついのがくるとおもってたのに

「いいでしょ？」

「え？あ、うん

一緒にかえろっか」

「うん！」

優ちゃんの家の前まで来た頃

「あ、優ちゃん」

「どうしたの？」

「あんな、約束でよかったの？」

「ぼくならいつでも一緒に帰るけど・・・」

「じゃ、じゃあ、もうひとつ言ったい？」

「うんいいよ」

「それじゃ、アタシを優ちゃんじゃなくて優子って呼んで／＼」

「え？えー？！？！？？」

「いや？」

「そ、そそそそうゆうことじゃないけど・・・」

「じゃ、呼んで？」

上目使い卑怯だよ

「ゆ、ゆゆゆうこ・・・」

「うん／＼」

なんで赤くなるの！？！？

「そ、それじゃ、ぼく帰るから

またね！！」

でも、なんなんだろうこの気持ち

ゆうこy・・・優子といるのは楽しいけど、明久や雄二、秀くんと
いるときの楽しいとは、また違うんだよね

かえって、母さんにでもきこつかな・・・

第十問 帰り道で・・・（後書き）

久遠の母（名前がない！）はどう答えるのでしょうか？

回答が目に見えてますが・・・

感想待ってマース

第十一問（前書き）

ぼくとFクラスと召喚獣の第十一問目です！

第十一問

「それは恋ね！」

開口一番母さんが言う

「……恋？」

「うん、久遠は優ちゃんの事が好きなのよ」

「……ぼくが……優子の事を……好き？」

「いやー、青春してるね

他にどんなことがある？」

「えっと、優子の事が頭から離れなくて、胸が締め付けられるような症状……」

「ホントに好きなのね」

母さんは優ちゃんなら大歓迎よ！」

「ちょ、ちよっと待ってよ」

「なんか問題でもある？」

「まだ、優子と結婚するなんて決まってるじゃないし（「ニョ」「ニョ」）」

「ふうん。ま、頑張りなさい！」

「分かった！」

久遠母 side

あの子が恋ね

優ちゃんも久遠の事が好きみたいだし

父さん、あなたの息子はきちんと成長してますよ

さてと、赤飯でも炊きますか！

久遠母 side out

翌日

明久 side

「あ、おはよう、久遠」

「ブツブツブツブツ」

「あれ？」

僕は久遠に挨拶したけど、返事が返ってこなかった
しかもなにかブツブツ言ってたし・・・
すると、雄二が来た

「あ、雄二おはよう」

「・・・ああ、明久おはよう」

「昨日のデートどうだった？」

羨ましいよね、あんなスタイル抜群な人と一緒にデートだなんて・・・

「目が覚めると、牛が殺されるシーンだった・・・」

「へ、へえ・・・」

「そして、脱走しようと試みたが、また、スタンガンで気絶させられた」

霧島さん怖！

「また、目が覚めると、牛が殺されるシーンだった」

「ホントに二回見たんだ・・・」

あ、そうだ雄二

「ん？なんだ？」

「久遠の様子が変なんだよ」

「どんな風に？」

「なんかね、声掛けてもぶつぶつ言ってて返事くれなかった」
「それ、ただ単にお前が嫌われただけだろ？」
「絶対、違う！」

僕達は、話しながら教室に入った

明久side out

N o s i d e

「あ、影月おはよう」
気軽に声をかける美波だが・・・
「ブツブツブツ」
「あれ？影月？」
久遠はそのまま席に着いた

「あ、美波おはよう」
「え？あ、うんおはよう」
「どうしたの？」
「いや、なんか影月の様子がおかしくて・・・」
「やっぱり？」
「え？」
「久遠、なんか朝からずっとブツブツ言ってるんだよね
どうしたのかな？」
「さ、さあ」

明久は考えるが、バカなのでなにも思いつかない（笑）

「明久君、おはようございます」
「おはようなのじゃ」
「・・・・・・・・おはよう」

次に行きたのは、瑞樹と秀吉、康太の3人だった

「うん、3人とも、おはよう

ねえ、なんか久遠の様子がおかしいんだけど、何か知らない？」

「影月君がですか？」

「そうなんだ。

なんかずっとブツブツ言ってるんだよ」

「うむ、ワシがなんとかしよう」

「え？ホント？」

「任せておれ、伊達に幼馴染はやっておらん」

「じゃ、じゃあ任せれるよ」

「うむ」

秀吉が久遠の方に歩いて行っただと

「木下君は大丈夫でしょうか？」

「まあ、大丈夫じゃない？」

秀吉 side

朝から、久遠の様子がおかしらしい

ワシがなんとかしてみせねばのう

もし、無理じゃったら、姉上に聞いてみるとするか

「おい、久遠よ」

「ブツブツブツ」

「……姉上がおるぞ？」

「ハッ！（ブンブンブン）」

顔上げ姉上がいるかを確かめていないと判断し、久遠はまたブツブツと言いだした

むう、これは姉上にしか無理か・・・

秀吉 side out

「秀吉でもダメか・・・」

「うむ、姉上なら何とかできると思っのじゃが・・・」

「それじゃ、木下さん呼びに行きましょう」

「うん、そうだね」

「うむ、行くかの」

「それじゃ行くぞ」

「ウチも行くわ」

「・・・行く」

明久達は、Aクラスに向かった

「・・・失礼します」

「姉上ちよつといいかの？」

「どうしたの、秀吉」

「久遠がおかしいのを何とかしてほしいのじゃ」

秀吉は心底困ったように言う

「なにがあつたか知らないけど行くわ」

久遠はまだブツブツ言っていた

「久遠、ちよつといい？」

「ビクッ！」

久遠は優子の声を聞くと同時に教室をものすごいスピードで出て行

った

「「「なんか、分かった気がする（のじゃ）」」」
「え？え？どうゆうこと」

「「「木下さん（姉上）は知らない方がいい」」」

久遠side

ぼくは、朝からずっと悩んでいた
もし、告白したら、この関係が壊れてしまうこと

ずっと考えていると、優子が来たのでびっくりして思わず飛び出してしまった・・・

（うう、まともに顔をあわせられないよう・・・）

ぼくは今、屋上で転がっている

そしてそのまま眠った

久遠side out

優子side

（ううん、久遠はどうしたのかな）

アタシは、今朝、久遠に声をかけると顔を真っ赤にして走り去ったので気になっていた。

そして、今は授業中であてられるのは当たり前である

「木下さん、次のところを読んでください」

「へ？え？あ！、すみません、聞いてませんでした・・・」

「ハア、教科書の52ページです」

（ああもう！久遠のせいで恥をかいたじゃない）

そのまま授業を受けて昼休みになり、アタシは代表と愛子とご飯を食べている。

「ねえ、聞いてよ今朝、久遠に声をかけたら顔を真っ赤にしてにげ
「・・・愛子なんでにやけてるの？」

「えゝ？そんなことないよ」

「ま、いいけど」

「で、続きは？」

愛子に急かされ今朝会ったことを話すと

「それ！影月君が優子の事を好きなのを気付いたんじゃないの！？」

「・・・愛子それを言っちゃダメ。本人達の問題だから。」

「え？え？久遠がアタシの事を好きなの？」

アタシはすごく驚いた

最初はウソだと思ったけど、顔を真っ赤にして出て行ったのをうなづける

（どうしょ？アタシも好きなんだけど久遠とは釣り合わないよ／＼）

「代表」

「・・・何？」

「優子がなんか落ち込んだんだけど・・・」

「・・・釣り合わないと思ってるんじゃない？」

「なんで、わかるの！？」

「・・・勘」

こわっ！

「はあ、屋上に行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃい」

優子 s i d e o u t

久遠 s i d e

ぼくが目を覚ますと、時間的に4時間目の後半だった。
それにしても、懐かしい夢だったな。
ぼくの初恋は小1からだから・・・9年！？長いな。
でも、それを終わらせないといけないよね
いつまでも、長延ばしにできないし！

キンコーンカーン

昼休みか、もうひと眠りするかな。

ぼくはもう一回眠った・・・

久遠 s i d e o u t

優子 s i d e

アタシが屋上に行くと、先客がいた。

それは、アタシの想い人

影月 久遠だった・・・

優子 s i d e o u t

第十一問（後書き）

駄文で申し訳ないです・・・

第十二問

父さんが死んだ頃はぼくも、小さく幼かった……

ぼくは、今までにないくらい泣いた……

学校もずっと休み、家からは出なくなっていた……

父さんに貰ったハーモニカ

これを抱きしめ毎晩泣いていた……

父さんにはいろいろなことを教えてもらった

大事なことを始め、どうでもいいこともあった

その一つ一つが思い出としてよみがえり、余計に悲しくなったりもした。

いつもいつも一緒だった父さん

ぼくは、その悲しみの呪縛から抜け出せなくなっていた……

学校の先生や友達が来ても、何も話せなかった

そんな時、優子がぼくの家に来て、ぼくに声をかけてくれた

その時の優子は泣きながら言ってくれた

「くおんが、そんなんならあたし達はどうなるの!？」

励ましてもない言葉にぼくは驚いたけど、いつまでの父さんの死を引きつってはいけなと思ったとも同時にぼくは、そんな不器用な励まししかできない優子にこの時から好きになっていたんだと思う。

父さんの「一度好きになった女は最後まで愛せ!」の言葉

ぼくは、優子の事が好きだ

今までの関係が壊れるのが怖い!でも、そんなことでは、前に行けないから……

ぼくは目を覚まし、頬に流れた、涙をぬぐった
「父さん、ぼくは前に進む……」
独り言をつぶやいた時
屋上の扉が開く音がした

「く、久遠？」

「ふえ？」

ゆ、優子かどうしたの？」

「え、えつと風に当たりに来た……」

「そうなんだ」

「……」

沈黙が続いた。

「優子に言いたいことがあるんだ」

「なに？」

ぼくは、多き深呼吸をして

「ぼくは、優子の事が好き！ぼくと付き合ってください」
告白した直後、優子が抱きついてきた

「アタシも、久遠の事が大好き

でも、アタシ胸小さいよ？」

「胸なんて関係ないよ」

「嫉妬深いよ？」

「それだけ愛されてることだから構わない」

「それじゃ、それじゃ……」

「優子、ぼくはありのままの優子が好きなんだ
だから、気にする必要なんてないよ？」

「ありがと、アタシもありのままの久遠が大好きアタシでよかったら付き合ってください」

「はい、喜んで！」

「必ず、幸せにします」

父さん、ぼくは木下優子さんを一生愛するよ

「優子」

「どうしたの？」

「一生、一緒にいようね」

「うん！」

「おーおー、お熱いことで（にやにや）」

「優子が心配で追いかけてきちゃったけど、その心配はいらなかったみたいだね」

「……………私も、雄二からあんな告白がされたい」

「……………おめでとう、久遠」

「木下さん、おめでとうございます。」

「影月、木下さんを泣かすんじゃないわよ？」

「久遠、これからがんばってね」

「ふう、やっと付き合うようになったかのう」

久遠、姉上を泣かすでないぞ？」

「「み、みんなどこからみてたの？」

「「「「「秀吉（木下）（木下君）」「」「」」」」

「うむ『優子に言いたいことがあるんだ』からかの」

「ほとんど、最初からじゃないか！

それと、声真似やめて、ものすごく恥ずかしいから！」

ぼくは今までにないくらい、赤くなっているだろう

優子も赤くなっていた

「お主はなぜ姉上が来た時逃げたのじゃ？」

「え、えつと、それは・・・／＼／＼」

「あ、それ僕も聞きたい」

「えつと、ぼく昨日、優子の事が好きなんだって気付いたんだ

秀くんや明久という楽しさとはまた違う楽しさがあってそれから

（シュー）」

「久遠が処理落ち仕掛けてる！？」

その後も女子は優子に、男子はぼくをとりかこみ話を聞いていた

これが、放課後になると、FFF団に掛けられ、ぼくは9分（新記録）で倒した・・・

その日の夜

「・・・ねえどうして赤飯なの？」

「優ちゃんと付き合ってるんでしょ？」

「なんで知ってるの！？」

「フッフ、秘密よ」

影月家、木下家では赤飯がなんだと言う・・・

第十二問（後書き）

久遠と優子がつながりました

第十三問

桜の花がこの坂から姿を消し、新緑の花が芽吹き始めたこの季節。文月学園にはまた一つイベントが近づくこの季節。その、イベントに興味を示さないクラス

その、クラスは

2年Fクラス！！

「きなよ、明久！」

「いくよ、久遠！」

「明久のボールなんか、ホームランにしてやる！！」

ホームルーム中の時間でばくらは、野球をしていた！

「言っただな！？やってみろ」

明久の後ろから砂煙を出しながら走ってくる西村先生を見た瞬間、ぼくはFクラスに駆け上がった！

壁を垂直に走りました・・・

「プハア、しんど！」

「」「うわぁ！？」「」

「あ、ゴメンゴメン」

中にいた、秀くん、姫路さん、島田さんに謝る

「お、お主はどこから上がってきたのじゃ！？」

「壁を垂直に走って・・・あれ？ぼく人間離れしてることに平然とや

ったね？」

「ワシの想像を遥かに超える回答が返ってきたぞい……」
秀くんは呆れてるが、姫路さんと島田さんは目を点にしてる

その後、鉄人は怒鳴りながら、雄二と明久を追いかけていた。

「まったく、お前達は学園祭の売り上げで、設備を上げようと結う
考えはないのか？」

『『『それだ！』『』『』』

このクラスってやっぱり単純だよね……

でも、雄二はやる気がなくて、実行委員を作ろうとしていた
1人は島田さん
もう一人は候補を上げることとなった

？ 吉井

まあ、予想通りだね

？ 明久

ぼくのめがおかしいのかな？

どっちみち、明久がなるんだろうけど

「この2人のどっちかで選んでくれ」

「うーんどうする？」

「両方ともクズだしな」

「こら！人前で屑呼ばわりするな！！って久遠なんで、お前は屑だ
ろ？みたいな視線送ってるのさ！？」

「えゝ気のせいだよ」

「だから、その目やめて！？」

こんな感じでFクラスは日常的でした
「これを、日常にすんな！」

みんなが、出し物を決めてる間、優子にメールをしていた。

T o 優子

F r o m 久遠

R e

今度の日曜日、暇？

1分後

T o 久遠

F r o m 優子

R e R e

暇だけど、どうしたの？

授業中だよね？

人のこと言えないけど・・・

T o 優子

F r o m 久遠

R e R e R e

どこかに行かない？

T o 久遠

F r o m 優子

R e R e R e R e

いいわよ

10時に噴水の前でいいかしら？

T o 優子

From 久遠
ReReReReRe

OK
じゃ、まったね〜

ぼくたちのメールが終わると

訳の分からない、出店名が並んでいた

鉄人が来て、明久を実行委員に選んだことが悪い！と言っていた
あなた、それが教師の発言ですか・・・

ぼくは、帰り支度を始め、帰っていると、優子の悲鳴が聞こえたよう
な気がして、走った

そこには、雄二と明久、優子（たいそうふくver）がいた

「ねえ、雄二、明久これはどうゆうことかな？かな？」

「こ、これはその・・・」

バキッボクツガキッ！！

二つの屍がいた

「優子、大丈夫なにもされてない？」

「うん、ありがと」

「よかった〜」

それじゃー、にしむらせんせー」

「なんだ？」

「この二人は女子更衣室にいました。

そして、優子が危険な目にあっただので、ご指導よろしく願いし
まーす」

「わかった、きつちりとしごとく
やった」

その後、優子を待って一緒に帰った

その週の日曜日

ぼくと優子の初デート

第十四問 初デート

9：30

ぼくは、噴水の近くまで、来ていたけど、優子が3人の男に絡まれていた。

なにになに？

『ちよ、はなしなさいよ！』

『無理無理、オレ達と良い事しない？』

『俺は気が強い子が好きだぜ』

『オレ達と遊ぼうぜ』

ふむふむ

ブッチーン！

オレの中で何かがキレル音がした

オレは、そいつらに寄って行き、一番手前にいた男の後頭部を殴った

「オレの、つれに何か用ですか？（ニコニコ）」

オレは、にこにこしてるけど、どす黒いオーラをはなっているだろう

「んだよ！てめえ！」

「やんのか！？」

「そっちがその気なら、オレも本気で行くぞ！」

オレは、そいつらを10秒で土下座させていた。

FFF団より弱かった

「「「すいまんっしたー！」「」」

「もう、この子にこんなことしたら・・・殺すよ？」

「「「ひいっ！！自分調子くれてました」「」」

「逝つてよし」誤字ではないです

「「「ありがとうございやすー！」「」」

そう言々とチンピラ達は逃げて行った

「優子、ごめんね大丈夫だった？」

「うん、ありがとう」

「それじゃいこっか」

「うん」

「どこか、行きたい所ない？」

「ん、映画見たいかな」

「分かった」

ぼくと、優子は自然に手をつなぎ、映画館に入った

内容は、純愛物で最後が感動できた。

優子は、感涙してたけど

ぼくわねえ？ほらあれですよあれ

「どれ？」

作者さんは引つ込んで！

「すみませんでした」

「優子、どうだった？」

「すごくよかったわ」

ぐうぐう

「そろそろ、お昼にしようか？」

「う、うん／＼」

映画が終わったのは12時40分なので、もう昼時だった。

ぼくと優子は、近くにあったサイリアに入って、1時間ぐらい話していた。

「で、次はどこに行くのかな？久遠？」

「ん、商店街で買い物しない？」

「うんそれいいね、ちょうど買いたい物もあったし」

ぼくたちは、歩いて商店街に向かい、買い物をした。

「久遠、どっちがいいと思う？」

そう言っでとりだしたのは、薄いピンクのワンピースと白のワンピース

「ん、優子ならどっちでも似合いそうだけど、ピンクの方がな？」

「わかった、これ買ってくるね」

「ぼくが、払うよ」

「いいわよ、自分のんだし」

「それじゃ、ぼくからのプレゼントからってことで」

「わ、わかったわよ／＼」

そう言っで、会計を済ました。

「ねえ、ゲームセンターでプリクラとらない？」

「うん、いいよ」

すぐ近くにあつたゲームセンターを指さしながら言う

優子は台を選んでたけど、ぼくにはさっぱりわからなかった

お互い200円ずつ入れて、カメラの前に立つた

秒カウントが始まり、1秒になった時、優子がぼくの頬にキスをした。

「ゆ、優子？／＼」

「えへへ／＼」

可愛いよ、可愛すぎるよ／＼

そんなこんなでゲームセンターを出たころ、もう夕日が沈みかけていた

「ねえ、優子」

「どうしたの？」

「公園に行かない？」

「公園？いいわよ」

ここからは、少し遠い公園は、この時間、夕日が綺麗に見えるので
ぼくのお気に入りスポット。

「優子、楽しみにしててよ？」

「なんか言った？」

「いや、なんでもないよ？」

「ふうん」

「ついたら、優子はちよつと目を瞑ってて、見せたい物があるから」
「分かった」

少し歩くと、見えてきた

「優子、目開けていいよ？」

優子 side

アタシは、久遠に目を瞑るように言われて、目を瞑ったまま、久遠
に手をひかれ歩いていた

「優子、目開けていいよ？」

久遠の声。

アタシはゆっくり目を開ける

そこには夕日だけが見えていた

障害物が何もなく、なにかもを照らしているような気がした

優子 side out

久遠 side

優子に目を開けるように言うと

優子はゆっくりと目を開けて、言葉が出ないでいた

「どうだった？」

「……綺麗」

優子は、そう答えると

意識を戻して「すごく、綺麗。久遠連れてきてくれてありがとう！」
その言葉を聞いただけでうれしくて仕方なかった。

「どういたしまして」

僕は、その夕日をバックに唇を重ねた

その日の帰り

優子とデートの帰り、たわいもない会話をしている
でも、ぼくの視界に信号無視してきた自動車が目に入った

「優子、危ない！」

ぼくは、優子の手を引いたけど変わりに自動車が来るところに入ってしまった

そして、ぼくと自動車は接触し、優子が叫んでいたのを最後に意識を暗闇に落とした

久遠 side out

第十四問 初デート（後書き）

久遠が交通事故に巻き込まれました

この後はどうなるのでしょうか？
作者にも全く分かりません！

第十五問（前書き）

ぐだぐだになってます
すみません・・・

第十五問

優子 s i d e

今日のデートの振り返りながら、あたし達は帰っていた
いつもと変わらないような会話だったけど、久遠といるだけで、ま
ったく違うような感じがした
久遠はアタシといるときいつも笑顔でいてくれる
その笑顔にいつもドキッとさせられる

でも、そんな久遠がいなくなるなんて考えてもなかった。

交差点に差し掛かると、信号無視の車がアタシの方に突っ込んできた

「優子、危ない！」

アタシはその言葉と共に、車の進路から外れたけど、久遠が車にひ
かれた……

「久遠！！」

「優子、無事で………よか………った………」

久遠の意識がなくなり、アタシは泣き叫んだ

その後、誰が連絡したのか分からないけど、救急車がきて、久遠と
泣いてるあたしを乗せて近くの総合病院に運ばれた……

優子 s i d e o u t

秀吉 side

時刻は夕方、夕日も沈んでいった頃、一本の電話が入った。

P r i P r i P r i P r i

「今出るのじゃー」

ワシは独り言をつぶやきながら、電話を取った

「もしもしなのじゃ」

『その声は、秀くん？』

電話の相手は、久遠の母上じゃった

「うむ、秀吉じゃがどうかしたのかのう？」

『落ち着いて聞いてね』

久遠が交通事故に巻き込まれて、 総合病院に運ばれたってさ

つき電話がかかってきたの・・・』

「そ、それは誠なのか？」

久遠は無事なのか？」

『わからないけど、あの子なら大丈夫』

守りたい人ができたって、言ってたから

きつと、きつと戻ってくる。

それで、秀くんも病院に来て優ちゃんを励ましてほしいのよ』

「わ、わかったのじゃ！」

ワシは、電話を置き、久遠のいる病院に走って行った

ワシが駆け付けた時には姉上は、下を向き泣いていた

「姉上！！」

ワシは、走り姉上を呼んだ

「秀吉い、どうしょ？久遠が久遠があ！」

「大丈夫じゃ、安心せい！」

あやつは絶対帰ってくるぞい！」

久遠、死ぬなよ？

お主には姉上がいるから絶対に死ぬんじゃないぞい
例えどんなことがあってもじゃ・・・

秀吉 side out

優子 side

アタシはこれまでにないくらい泣いていた。

「姉上！！」

秀吉が来てくれた。

アタシは、秀吉に抱きつき、泣いていた。

そんなアタシを秀吉は励ましてくれた

少し元気が出てきた。

秀吉にはいつも出来の悪い弟とか言ってるけど、今はものすごく頼りになった。

でも、やっぱり久遠がいないとアタシはやっぱり久遠を一番頼りにしてる

日付が変わる頃、手術が終わった

優子 side out

久遠side

ここはどこなんだろう？

ぼくは、歩き続けた、何も無い白い空間をそこに、知ってる顔がいた。

「とう……さん？」

「久遠か……」

大きくなったな

ぼくが、小さい時に亡くなった父さんは優しい雰囲気を漂わせていた。

「どうした？こんなところに来て」

「実はね、優子が車に跳ねられそうなのを庇ったらぼくが弾かれちゃったんだ」

「そうか、優ちゃんとはどんな関係なんだ？」

「恋人」

ぼくは、一生優子の事を愛するって決めたんだけど、もう死んじやったみたいだしね」

「そうか、大事な人を守ったんだな？」

でもな、お前はここに来るのは早過ぎた
優ちゃんやその周りの人のところに戻れ」

「え？」

「お前は、まだ生きれるんだ。そして、幸せになってこい！」

「分かったよ。」

久しぶりにとうさんと話せてよかった

それじゃーね」

「ああ、行ってこい」

ぼくの周りを光が囲み、そのまま意識を失った

久遠 side out

秀吉 side

久遠が手術をした2日後まだ久遠は意識を取り戻さなかったが、ワシは学校に来ていた
姉上は休んでおるが・・・

「明久、雄二、ムツツリー二に姫路と島田ちよつといいかのう？」

「どうしたの、秀吉？」 明久

「そうよ、そんなに暗い顔して」 美波

「実はのう、久遠が交通事故に巻き込まれてのう」

「なんだと！？」

「それで、久遠は大丈夫なのか！？」 雄二

「手術は成功したんじやが、意識を取り戻さなくているのじや」

ワシは明久達に久遠の事を伝えたのじやが、みな、信じられんとゆう顔をしておる。

「そ、それで木下さんはどうしてるのですか？」 姫路

「姉上はずっと久遠についておる」

「そうなんですか・・・」

「大丈夫じや、久遠は絶対に意識を取り戻す。

じやから、お主たちはそこまで心配する必要はないのじや」

ワシは作り笑いをしてごまかした

その日の授業はなにも頭に入らなかった・・・

秀吉 side out

優子 side

久遠の手術が終わって2日後

久遠はまだ目をさまない

「早く、戻ってよ久遠」

アタシは祈ることしかできなかった

アタシはおもむろに、久遠のハーモニカに手を伸ばし、音を奏でた。

久遠の好きな音を耳だけ出て覚えていたけど、指が勝手に動く

窓の外に向かって吹く

涙が出てきたけど、それでも吹いた

綺麗な音だね」

「

第十六問

久遠side

光に包まれて、また白い空間を歩きだしたぼくは、いろんなことを思い出しながら歩いていた。

公園で泣いてる、ぼくと同じくらいの年をした女の子がブランコに座っていて泣いていた。

「どうしたの？」

当初、幼かった僕は躊躇なく、声をかけた

「えくつえくつ」

ずっと泣いている女の子に手を差し伸べると、その女の子はぼくの手に見て、手を差し出してきた

「どうしたの？」

ぼくはもう一度同じ質問をした

「帰り道が、分からなくなっちゃった」

「ぼくが、一緒に探してあげる！」

「ほんと？」

「うん、ほんと！」

泣いてないで行こうよ」

「わかった」

女の子の顔は、笑顔になり、とても可愛かった
これが、ぼくと優子との出会い。

優子の家を探し始めたけど、あまり、分からなくなっていた。
もう、夕日も沈み、真っ暗になっていた

「とりあえず、ぼくのお家に行く？」

「うん、行く」

涙目になっていた女の子を励ましながら歩いた
ぼくの家が見え始めたころ

「あ！アタシの家だ」

「え？ホント？」

「うん！、ここアタシの家！」

意外にも家が向かい同士だった

それから、秀くんとの出会い、幼稚園や小学校で一緒に渡航しあ日々など、様々なことを思い出した

光が見え始めた時、ハーモニカの奏でる綺麗な音楽が聞こえるとともに

ぼくは目を覚ました・・・

「綺麗な音だね」

素直にそう思った。

優子は、ぼくの方を向いて、凄く驚いていた。
そして、涙が零れおちている

「くおん？」

「ただいま、もう一度それを聞かせて？」

「わかった」

涙を拭き、笑顔で言った

そして、吹き始めた曲は、優しく、清らかでどこか楽しそうな曲
そして吹き終わる。

「久遠」

「どうしたの？」

「ありがとう」

「ぼくなんかした？」

疑問に思う。

普通は、心配かけるなーとか怒りそうなのに・・・

「ちゃんと、戻ってきてくれたから」

「ぼくは、どこにも行かないし、もう優子を泣かせたりしないから」
「うん！」

先生が来て、清涼祭の2日目は出てもいいことになった。

優子は安心したのか僕の隣のベットで寝ている

（可愛いよね、優子は

ぼくに過ぎたる女性だよ）

ぼくは、優子の頬にキスをした

翌日

いつものメンバー＋霧島さんと工藤さん、西村先生が見舞い来てくれた

西村先生が来てくれたのは意外だったね（笑）

「あ、そうだ優子」

「ん？どうしたの？」

優子は毎日見舞いに来てくれます
うれしいですね。

「ぼくの部屋にギターがあるんだけど、明日持ってきてくれない？」

「あんた、ギター始めたの？」

「まあね、音楽は好きだからね」

ぼくは、中学校の時からギターを弾いているので、うまい自信はあります。

「うん、分かったわ」

「ありがとねえ」

「気に入らないでいいわよ」

いつも、見舞いに来てくれる、母さんや優子に秀くん以外のクラス
メイトたち

ぼくは、ホントに恵まれてるよね

今はものすごく幸せだよ

優子に持ってきてもらった、アコギを屋上で弾いている。

「うまいわね」

「うん、中学のころからやってたから、これが、第三の宝物かな？」

「へえ、第二わ？」

「ハーモニカだよ？」

「え？じゃあ第一はなんなのよ？」

「優子に決まってるじゃん／＼」

「あ、ありがと／＼」

久遠母 side

相変わらず、あの子たちは、熱いわね
ホント、うちわが欲しいくらいだわ

「あ、久遠のお母さんこんにちは」

「あらあら、明久君じゃない」

「ごめんね、今は優ちゃんと熱い時間を過ごしてるのよ」

「はは、相変わらず、仲がいいですね」

羨ましいです」

「明久君にもそんな女の子はよってくるわよ？

絶対にね」

若いっていいわね

私も、お父さんと高校生になって付き合い始めたから、久遠達の気持ちわかるのよね」

久遠、頑張りなさいよ！

久遠母 side out

第十六問（後書き）

P V 1 2 0 0 0

ユニーク2000を越えました。

こんな駄文を見ていてくれる人に感謝を申し上げます
ありがとうございます

これからも、ぼくとFクラスと召喚獣をよろしくお願いします

第十七問 遅れた清涼祭！！

ぼくが、退院した日は清涼祭の1日目だったのででれなかった
少し、悲しいです……

その分2日目を張り切るけどね！

ぼくの目にひとつの新聞？が止まった

文月新聞

今日から、事故で入院していた、2年Fクラスの影月久遠君が登校
します

私達新聞部は影月君に突撃インタビューをしたいと思っています
！！

次の、発行をまで期待しててください！

とのこと

（うわぁ、なに聞かれるんだろ？

ん？これは、明久の記事？）

ぼくが見たのは、明久がメイド服を着ている記事だった……
（明久、目覚めたんだ）

ぼくは友達の性癖に少し落ち込んだりもした。

教室に向かう時、秀くと会い、職員室についてきてほしいのと
とで着いて行った

ぼくは、Fクラスに着いた時、言葉を失った

だって、Fクラスとは思えないくらいに綺麗になつていたんだからね
「秀くん、どうしてこんなにきれいになつているの？」

「む？全員で飾りつけなどをしたからのう」

Fクラスがやる気を出すことが意外です

「それじゃ、はいるか」

「うむ」

パンッパンッパンッ！！

教師つの扉を開けると、クラッカーが鳴り響き、黒板には『影月
久遠 退院おめでとう！』の文字があつた

「「「「「「影月、退院おめでとう」「「「「「」

「みんな、ありがとう。」

今日は、昨日の分も合わせてガンガン働くからね！」

「「「「「「おう！」「「「「「」

教室には、Fクラスを始め、優子に霧島さん、工藤さんと西村先生
もいた

Fクラスのみんなはバカで単純だけど、仲間思いな所があると、改
めて思った。

普段のFクラスに仲間思いという言葉は存在しません。

「さてと、朝から、テスト受けてて、眠いから屋上で寝てくるわ」

「ぼくも行くよ、１１時になったら起こして」

えっと、彼らに何があるのだろう？

「やつぱり、一緒に寝るのかしら」

えっと、話しについていけないです

「秀くん、なんかあるの？」

「うむ、清涼祭のイベントでいう、雄二と明久が決勝に残ったのじや」

「へえ、頑張ってたほしいね」

明久達が戻ってきたときに大繁盛でむかえようか！

「「「「おう！」「」「」」

「いらつしやいませ

中華喫茶『ヨーロッパアン』へようこそ！」

ぼくは、接客をしていた。

退院おめでとう！とか

久しぶりとか

色々言ってくれる人がいました

ぼくは、幸せ者ですね

「影月、休憩していいわよ」

「え？でも、昨日来てなかったから・・・」

「いいのよ、あんた今日働けばなしだからどこか行ってきなさい
って」

「そうですよ、みなさんもいつてますし」

「そっだぞ、影月、ちったあ休憩しろや」

「分かったよ、ありがとねー」

ぼくは、教室を出たのはいいけど、どこにいこつかなあ、そうだAクラスはメイド喫茶だよな
いつてみよー

「おかえりなさいませ、ご主人様!!??」

「ゆ、ゆうこ!?!」

優子に接客されるとはびっくりだね

「えっと、こちらへどうぞノノノ」

「う、うんありがと(うう、凄く似合ってるようノノノ)」

ぼくは、パンのセットとアイスコーヒーを頼んだ

「お待たせしました。パンセットとアイスコーヒーとメイドとの婚姻届けです」

ちよつとまって?

状況確認

パンのセットとアイスコーヒーを注文

注文したもの+婚姻届が出てくる

OK

「えっと、優子?

なんで、婚姻届?」

「べ、別にいいじゃない。

おばさんに実印貸してもらってるから、押してくれない？」
優子と結婚？

ぼくはまだ結婚できないけどね

ぼくは、優子から、ハンコを受け取り、婚姻届に推した

「まだ、結婚できないけど、卒業したらしようね？」

「ふえ？う、うんありがとう／＼」

ぼくと優子は婚約者になりました

第十八問

「それじゃ、優子、ぼくは帰るからね
こっちにも、遊びに来てよ」

「うん、分かったわ」

廊下を歩いていると、またもや、退院おめでとうとか声をかけられた

ぼくって、人気があるのでしょうか？

「あ、影月君やつと見つけた！」

声をかけてきたのは、知らない先輩？だった

「えっと、どちらさまでしょうか？」

「私はね、新聞部の部長さんよ！」

「は、はあ

で、なにかご用でしょうか？」

ぼくは疑問に思いました

新聞部と何か話すようなことがあるのでしょうか？

「これを見て！」

取りだされた紙を見てみると

『彼氏にしたいランキング1位』 全学年

『弟にしたいランキング1位』 3学年のみ

『兄にしたいランキング1位』 1学年のみ

・・・

「えっと、なんですかこれ？」

「三冠王よ！」

ウインクしながら、言う先輩

「状況があまり、分からないです・・・」

「まあ、とにかく、三冠王のコメントを取りに来たのよ
とりあえずコメントちょうだい！」

「えっと、死んだ父親がよく言っていました『久遠、男ならなにがな
んでも、一番をとってみる！』と

父さん、ぼくは三冠王に輝いたよ」

「時間とらせてごめんねー

来週この記事書くからー

よろしくー」

疾風のごとく走り去る、先輩

（そっぴゃ、聞いてないな

ま、いつかどうせもう取材なんてないだろうし・・・）

「さてと、Fクラスへ帰りますか！」

Fクラスへと歩き出した

「ただいまーってうわっ！」

Fクラスは、満席で、ホールを任されていた、人たちが走りまわっ
ていた

ぼくは、すぐに着替え、ホールにでた

雄二と明久もいた

どうやら、優勝したみたいで、その顔を見にお客さんが増えたらしい

その中には久遠を見に来たお客さんもいた

『ただいまの時間を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。
各生徒は、速やかに撤収作業を行ってください』

「終わった〜」

ぼくは、イスに座り込んだ

「お、おわった」

「さすがに疲れたのう」

「・・・・・・（コクコク）」

全員疲れたみたい

それもそうか、あれだけ繁盛してれば

「そういえば、姫路さんのお父さんどうしたんだろ？」

「なんだ？未来のお義父さんが気になるのか？」

「べ、べつにそうゆう意味じゃないよ」

「ん？なにかあったの？」

「実は、姫路が転校しそうになっててな」

「そ、そうだったんだ」

明久、頑張つてね？」

「久遠まで、なんてこと言うんだよ！」

ぼく達は、笑っていた

「じゃ、ウチらは着替えてくるから」

落ち着いた時に島田さんは言つて、教室を出て行くこととするが

「え、どうして!？」

明久、驚き過ぎ

普通は着替えるでしょ

「恥ずかしいからに決まってるでしょ！」
それはそうだ（笑）

「ワシもいくかのう」

「秀吉はダメ！」

「・・・！！（コクコク）」

明久と康太が秀くんを抑えた

「なにやってんの！？」

「秀吉にはこのままでいてもらう！」
秀くんは苦労ものですな

「おい、明久、ムツツリー二行くぞ」

「どこに？」

「学園長室だ」

「うんわかった」

「なんで、学園長室に行くの？」

「ああ、気にしないでくれ」

「え？うんわかった」

ぼく達が、片付けをしていると、花火が屋上と教頭室に直撃して、
西村先生に追いかけていた

「なにやってんだか・・・」

ぼくのつぶやきは誰にも聞こえなかった

第十九問

「えっと、みんな2日間お疲れ様

今回の学園祭はみんななどのいい思い出になりました。

これからも、楽しい学園生活を送りましょう！

てことで、かんぱーい！」

「「「「かんぱーい！」「」」」」

Fクラス（2名除く）の打ち上げが始まった

ぼくは1日しか行つてないけど、すぐたのしかった

考え事をしていると、顔を倍に膨れ上がった2人が来た

「えっと、明久、雄二お疲れ様？」

「「なぜ、疑問形？」」

わかりませんね

「それじゃ、楽しましょっか？」

「「おう（うん）」」

僕達が雑談していると、島田さんが話に入ってきた

「あれだけの事をやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ ウチだって気になるし」

島田さんが、明久と雄二にジュースの入った紙コップを手渡す。

「ん、ありがとう」

「ああ、サンキュ。それで、店の売り上げはどうだった？」

「そうね。すごいって程じゃなかったけど、たった2日間の稼ぎとしては、結構な額になったんじゃないかしら？」

「ふむ、どれどれ……？」

島田さんが収支の書かれたノートを取り出し、雄二がそれを覗き込む。

それを見て、少々顔をしかめる。

「この額だと、机といすは苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」

「やっぱりな……あの常夏コンビ共さえいなけりゃ、もう少しましだったかもしれないけど」

常夏コンビ？

ホントぼくがいない間に何があっただろう

「確かに、それが痛いよね……ところで、姫路さんは？」

ぼく達が騒いでいる間、姫路さんの姿だけはなかった

「大丈夫だろ、俺達は結果を残した。多少、設備に問題があるけどな」

「すみません、遅れましたー」

雄二のフォローの後、微笑ましい姿で走ってくる姫路さん

「あ、瑞樹。どうだった？」

「はいっ！ お父さんも分かってくれました！ 美波ちゃんの協力のおかげです！」

その言葉を聞いて、ホッと一息つく明久

ぼくは、缶ビールを飲み干し、ゴミ箱に入れた

「あ、久遠」

後ろから声をかけられる

選択肢

? 後ろに振り向いて返事をする

? 無視する

? 振り向いてキスをする

? 暴言を吐く

ちよつとまった!

?と?

がおかしい!

てことで、1だね

「ん? ああ、優子

これ飲む?」

ぼくが差し出したのは、チューハイ

「ええ、いただくわ」

優子のはのどが渴いていたようで一気に飲み干した

ぼくは今ものすごく後悔をした!

「くうおん」

酔った優子が抱きついてきたり

「抱いて」

とか

「キスをして」

とか言ってきたからね

そういえば、おじさんもおばさんも酒に弱かったな……

「雄二は、霧島さんとイチャイチャしてるから、明久も姫路さんと島田さんとイチャイチャしてるから、秀くん」

「なんじゃ？」

「優子がこの状態だから、家に連れて帰るね」

「うむ、分かったのじゃ」

帰り道

「スウー スウー」

「寝ちゃったか」

優子をおんぶして、家の前まで来ていた。

ピンポン

電子音が響く

「どちら様ですか？」

「影月ですけど」

「あら、久遠くんどうしたの？」

「優子を連れて帰ってきました」

「あら、そうそれじゃあがって？」

「有難うございます」

優子をベッドの上に置こうとしたけど裾を握られていた

「えっと、どうしたらいいんだろ？」

ぼくは優子と同じ部屋で一日を明かすこととなった

第十九問（後書き）

最近、あまり思いつかなくなってきた・・・

第二十問

優子 s i d e

目が覚めると、アタシが久遠を抱き枕にしているみたいでいた
久遠は気持ちよさそうに寝てるけど

「何この状況？」

この眩きは誰にも聞こえなかった

「ま、いつか。もう一回寝よつと」

アタシは、夢の中へ旅立った

優子 s i d e o u t

「ふぁゝ、あ！？」

起きて2秒ぼくはすぐに覚醒した。

だって、優子と抱き合って寝てるんだもん

「うう、どうしたらいいんだろ？」

「フアゝ、っ！！！」

優子も声にならない声を出している

そこから、20秒ぐらい見つめ合っていた

実際には10秒です

「お、おはよう」

「う、うんおはよう」

「・・・・・・・・・・」

「気まずー！」

「と、とりあえずどうか？」

「ぼくが立ちあがろうとするけど」

「優子が裾をひっぱていて、立ち上げれない？」

「優子？」

「もうちょつと寝てましようよ／＼」

「か、可愛すぎる！」

「ぼくの理性がー！ー！！」

「ぼくの理性はなんとか耐えました・・・
避妊用具ないのにやってたまるかー！」

「今日は、休日かー」

「あ、ちなみに今は自分の家ですよ」

「ご飯食べて、みんなと雑談して帰ってきました」

「優子とは、キスまでしましたが・・・」

「危なかった。非常に危なかった」

今は、家で勉強してます

ピンポン

誰かが家に着たみたいですね

「はい」

ぼくは扉を開けた

「あれ？優子に秀くんどうしたの？」

「「久遠？なんで（なぜ）メガネをかけてるの（のじゃ？）」「

「あ、ぼく、いつもはコンタクトなんだ

今日は、休日だしめんどくさいからいいかなーって」

「へ、へえそうなんだ（なんか、めっちゃくちゃいい！）」

「どうかしたのか、姉上？」

「どうもしないわよ！」

「立ち話も難だし、上がった〜」

優子と秀くんをリビングへと呼んだ

「今日は、どうしたの急に？」

「ちよつと、来てみたなくなつてのう」

「ええ、どんなところか気になってたし」

「へえ、なにもないけど、くつろいでいてね〜」

「「わかった（のじゃ）」「」

ぼく達は、雑談をしていたら、昼近くになっていた

「昼ごはんどうする？」

「外食って気分じゃないしね」

「うむ、どうするかのう」

そつえば冷蔵庫になんかあったかな？

「優子、秀くん

オムライス食べる？」

「「え？」」

「ぼく、オムライス作るの得意なんだよ」

ぼくは、オムライスだけは作れた

「頂くわ」

「そうじゃのう」

昼ごはんを食べ終わり、ぼくの部屋で雑談をしていると、急に睡魔が来て、そのままねてしまった

「ふあ、って優子と秀くんも寝てる」

ぼくは、2人に布団をきせ、リビングに向かった

「久遠、優ちゃんと秀くんが来てるの？」

「まあね

ところでいつ帰ってきたの？」

「3時半ぐらいかしらね

部屋にはいたら、3人仲良く寝てて昔を思い出したわよ」

「そつだね、昔はよく、一緒に遊んで一緒に寝てたよね」

なんか、久しぶりに母さんと話した気がするのは気のせいだろうか？

第二十問（後書き）

短くてすみません

第二十一問 プール編（前書き）

今回は、すごく短いです

第二十一問 プール編

明久 side

今日は、休日で、雄二が遊びに来ていた

「雄二、何か買ってきたの？」

「食い物だ。お前の家は何もないからな」

「へえ、差し入れとは気が利いてるね」

雄二はやっぱり友達なんだね

雄二は袋を開けて、中にあつたものを取り出す

・コーラ

・アイスコーヒー

・カップめん

・カップ焼きそば

食べ物と飲み物がそれぞれ2つ入っている

これありがたい

「雄二は何を食べるの？」

イスに座っている雄二に話しかける

「俺か？俺は」

「コーラとコーヒーとラーメンと焼きそばだ」

予想を裏切る答え

「貴様、僕に割り箸しか食べさせない気だな!？」

「割り箸空気がお前は？」

割り箸はやらん。俺が手で食べる羽目になる」

「失礼だなあ、無機物の袋よりは食べ物に近いよ」

「心配せんでも、ちゃんと買ってきてある」

さすが雄二だね！

・こんにやくゼリー

・ダイエツトコーラ

・心太^{トコロチン}

カロリー0!!

「僕の貴重な栄養源があああ!!」

僕と雄二はこの後

仁義なき戦いまで発展した

食べ物スタッフ（明久と雄二）がおいしく頂きました

明久side out

「ってことがあって、休日は散々だったよ」

「そうじゃったのか、それは災難じゃのう」

あれ？自業自得だと思っのはばくだけ？
整理してみよう

雄二が明久に家に行く

差し入れがカロリー0

明久が怒る

コーラをかけあう

べとべとになり、シャワーを浴びようとするが、明久の家はガス代を払ってない

学校のシャワーを使おうとする

ついでに、プールも使う

西村先生に見つかる

プール掃除をやることになる

現在に至る

うん、自業自得だね

ばくは間違ってた

「久遠、プールだがお前も来るか？」

「え？行つていいの？

もちろん行くけど・・・」

「後は島田と姫路だな」

そう言つて島田さんと姫路さんと呼ぶ

「雄二、優子も呼んでいい？」

「いいぞー」

さつそくメールを打つ

To 優子

休日学校のプールが使えることになったんだけど、行かない？

「送信つと」

2分後返信が来た

From 優子

いいわよー

時間とかはおつて聞かせてね

「優子は来るってさ」

「おう、分かった」

そしてそしてまたもや休日

「おい、優子、秀くん行くよー」
「ちよつと待って」

待つこと3分

「さ、行きましょっか」

「「そうだね（じゃな）」」

プールかあいつ振りだろう？
楽しみだなあ

第二十一問 プール編（後書き）

書けなくなってきた・・・

第二十二問

ぼく達がつく頃にはほとんど人が来ていた

「みんな、おはよう」

「「「「おはよう」「「「「

「秀くん、そういえば、新しい水着を買ってたけど
ちゃんと、持ってきた？」

「うむ、無論じゃ」

トランクスタイルだったわけ？

「ちなみに、男物のトランクスタイルじゃ」

「「「「「（ずーーん）」「「

あれ？2人ほどがっかりしてるね

秀くんはまだ女扱いなんだ

……タタタタッ！

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

「わわっ！？」

「もう葉月つてば、アキがビックリしてるでしょ？」

島田さんの妹？

分人氣が全然違うと思うのはぼくだけだろうか……

「なんで、葉月ちゃんが来たの？」

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから……」

と、島田さんがため息交じりに呟く

「いいんじゃないの？」

「それもそうだけど……あれ？ 坂本はまだ来てないの？ ウチが最後だと思ったのに」

「いえ、もう来てますよ？ 今職員室にかぎを借りに行つて……あ、丁度戻ってきたみたいです」

瑞樹の説明の最中に、校舎の方から雄二と翔子が歩いてきた。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

坂本夫婦の登場ですね

「代表も来てたんだ」

「……優子、今日は雄二と楽しまないといけないから」

「さてと、着替えるか」

「そうだね」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。
瑞希と美波、優子は翔子に。

明久と久遠とムッツリー二と秀吉と葉月は雄二に。

「……ん？　こちら、葉月ちゃんと秀吉は向こうでしょ？　霧島さんについて行かないとダメだよ」

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談じゃないのじゃが……？」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀くんだった。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田！？　ついにお主までそんな目でワシを見るように!？」

「ちよつと島田さん！　秀吉は……」

「あの……それなら、木下君は1人でどこか別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」

と、おずおずと手を挙げて提案する姫路さん。

というより、自分の常識がことごとく無視されてる事に、頭を抱える優子。

「……秀吉、あんた女って認識されてるって言う話、本当なのね？」

プールサイド

「久遠って意外に筋肉あるよね」

「うん、毎日筋トレとランニングやってるからね」

たまに、秀くんと一緒にやってます！

「あれ？誰か来てみたいだよ？明久」

とたとたと走ってきたのは紺色のアレを着た島田 葉月であつた

「どどどどどどどうしよう久遠！？ あれってスクール水着だよね！？ そんなものを着た小学生と遊んでいたら、逮捕されたりしないかな！？」

「……………弁護士を呼んでほしい（ボタボタボタ）」

「あのな……………落ち着け2人とも。小学生の水着姿でそこまでとりみだすな」

「なんで、そこまで取り乱すの！？」

雄二の冷静な突っ込みと久遠を驚きの声が響いた

「お兄ちゃん達、お待たせです」

と、息を弾ませて駆け寄ってきた葉月。
2人はある程度冷静になる様に…………。

「懲役は2年程度で済みそうだね」

「……………実刑はやむおえない（ボタボタボタ）」

……………いや、冷静ではなかった。

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」

「こ、コラ葉月っ！」

奥から島田さんが胸元を隠し怒りながら走ってきた

「お姉ちゃんのソレ、勝手に持っていったらダメでしょ！？ 返しなさいっ！」

「ソレ？ ……何のことだろ？」

「あうっ、ズレちゃいました」

「ん？ 今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パツ……」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」

「だめだよ！ その一撃で明久が死んじゃうから！」

「久遠、あんたも苦労しているんだ……」

「あ、優子」

優子に一瞬見とれてしまった

優子の水着は白のワンピースタイプだった

「に、似合うかしら？ / / /」

「う、うん凄く似合ってるよ / / /」

「「「あの2人は相変わらず惚気てるんだな（だね）」」」

周りの人たちの声はぼく達に聞こえなかった

第二十三問 平和は来ないのですか!?

えっと、なぜ、秀くんは女物の水着を着ていて、そしてもって、明久と康太が倒れていて、雄二は眼つぶしをくらっているんだろ？

「なんか、カオスだね」

「久遠、胃薬ないかしら？」

「あるよー」

「あるの!？」

「ぼくも、ちよくちよく痛くなるからね」

ええ、ぼくは1週間の内5日間は胃が痛くなります

「くれるかしら？」

「はい、水と薬。」

あ、水はぼくの飲みかけだけどいいかな？」

「うん、いいわよ」

優子が薬を飲み終わり、みんながプールで遊んでいた
ちなみにぼくは、パーカーをはおってます

「ぼくも、泳ぐかな」

「いつてらっしゃい」

プールに入り、泳ぎだした

その時、明久が霧島さんと呼んで話をしていた

次にぼくは目を疑ったね

だって、霧島さんが、雄二を沈めているんだから・・・

「明久アアア！！」

「てめえの仕業だろー！！」

「ヒイ！霧島さん早く沈めてー！！」

明久と雄二と翔子の鬼ごっこ！って名前がつきそうだね・・・

「優子、また始まったね」

「この人たちには平和がないのかしら？」

「あっても、一時期だけだよ・・・」

「あれ？代表に優子？」

「この声は？」

「愛子どうしたの？」

「今日部活があると思ったら休みだったんだよね

ところで、ボクも混じっていいかな？」

「いいんじゃない？」

工藤さんも、遊ぶことになりました

「・・・優子、ビーチバレーしょ？」

「いっていかしら？」

「うんいつてきなよ」

優子と霧島さんが走って行った

んー、暇になっちゃたなー

雄二と明久はあいかわらず喧嘩してるし・・・

「秀くん」

「む、久遠かどうしたのじゃ？」

「暇だから、話しない？」

「いいのじゃ」

秀くんと雑談していたら突然「久遠は姉上の事をどうおもっているのじゃ？」

「と、突然何言ってるの？」

「付き合っているんじゃない？ ほれほれ言ってみるがよい」

秀くんに弄られました

「そうだね、思い返せば、ぼくの初恋の相手は優子だったね。

多分、ぼくは優子の笑顔に惚れたと思う。

一番、幸せそうな優子の顔を見るのが今のぼくの楽しみだったりもするからね」

「ほう」

秀くんも真面目に聞いている

「あと、失敗した優子の顔を見たら、なんとかしてやりたいって気持ちにもなるかな。

厳しい性格だけど、ときより優しさを見せるところが一番好きだったりするよ」

ぼくが言い終わると、秀くんはニヤニヤしていた

「お主もやるのう。本人がいる前で平然と好きのところ言ってるんだからの」

「え！？」

後ろを振り向くと、優子と霧島さんと工藤さんがいた

「優子、愛されているね」

「……………私も雄二に言われたい」

「……………／／／」

三者三様の答え

優子はめっちゃ顔を赤くしてたけど

後から考えると、恥ずかしすぎる

「秀くん、どこか穴ないかな？」

今すぐ潜りたい!!」

「お、落ち着くのじゃ久遠!!」

結局、ぼくたちのところにも平和は訪れませんでした

「久遠!!ちよつとこい!!」

あれ?雄二が血相変えて呼んでる

「どうしたの?雄二

もしかして、婚姻届が出された?

諦めなよ。雄二、霧島さん何のこと好きなんですよ?」

「平然とありそうなことを言うな!

あと、俺は、翔子の事は何とも思ってたねえ!!」

「で、何用?」

「さりげにスルーしたな・・・

まあいい、姫路がワッフルを作ってきたんだが・・・」

「おお!いいことじゃない」

「いや、それなんだがな・・・」

雄二がハキハキ話さない

「どうしたの?」

「姫路の料理はな、薬品が入ってるんだ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ワンモア」

ぼくの幻聴かな?

薬品って聞こえたけど

「だから、薬品が入ってるんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぼくはじつ
しろと?」

「水泳対決で決めるんだがお前も入れ！」

「ぼく死ぬのはいやだよ！」

「大丈夫だ！1位と2位は食べなくていい」

「わかったやつてやるさ！！」

N o s i d e

さあ始まりました水泳レース！

おっと実況は私、神龍がお送りします！

久遠、康太、秀吉の三人は早くも折り返し地点

明久、雄二はドつきあいのかん中！！

おっと、ここで明久は秀吉、雄二は康太のレーンに入った！！

『ズルッ』ここで明久の手が秀吉の水着の上の部分にかかったああ
！！

康太：戦闘不能

明久：興奮状態

秀吉：驚きを隠せていない

雄二：康太、救出中！

久遠なにもしらずゴール

S i d e o u t

えっと、ぼくが一位でゴールした頃、プールの三分の一は血の色で染まっていました……

「優子、救急車宜しく……」

「分かったわ……」

月曜日

明久と雄二が西村先生に追いかけていましたとさ

くおしまいく

第二十三問 平和は来ないのですか！？（後書き）

次から、強化合宿編か閑話かのどちらかです

第二十四問（前書き）

駄作にもほどがある・・・

第二十四問

「ケンカしたあ!？」

「うん、昨日優子とけんかしたんだ……」

「壮絶な言いあいじゃったのう……」

「で、なんでケンカしたんだ？」

「それはね……」

日曜日

ぼくが優子と秀くんの家が行っていた

「久遠、紅茶とコーヒーどっちがいい？」

「コーヒーがいい」

あ、砂糖多めで」

ソファに座りながら返事をする

「ハア!？普通は微糖でしょうが!」

「いいや!甘アマの方が絶対いい!」

「ふ、二人とも落ち着くのじゃ!？」

「秀くん(秀吉)はだまって!」

「わかったのじゃ……」

30分間討論を繰り広げた

「「最高にくだらねえ（ない）よ！！」」

「怖かった、ものすごく怖かったのじゃ・・・」

「みんなひどいよ！せっかく相談してるのに！！」

「うるせえ、なんでコーヒーでそこまで喧嘩になるかが知りたいわ
！」

「男には譲れないものがあるんだよ！！」

「使いどころさえ、間違えなければ最高の台詞だな！」

「「まあまあ、おちついて」」

「雄二、一回落ち着こう、君とまでけんかはしたくない」

「同感だ」

話し合いの結果ぼくが謝ることになりました

「ねえ、秀くん」

「なんじゃ？」

「優子は許してくれるかな？」

「きつと、許してくれるじやろ」

優子に許してもらえなかったら・・・

優子 side

はぁ・・・

昨日、アタシと久遠は喧嘩してしまった・・・

「あれ？優子どうしたのそんなに落ち込んで？」

「あ、愛子か」

「話聞いてもらえる？」

「ボクでよかったら相談相手になるよ」

「うん、実はね・・・」

愛子に説明したら、最初は驚いていたけど、最後には笑われていた

「ちょっと、愛子！」

真剣に考えてよ！」

「ご、ごめん、でもコーヒーの砂糖の量で喧嘩とか……ぷははは」
愛子は涙を流しながら笑っている

「影月君とそんなことでケンカするなんて
ある意味すごいね優子達」

「で、ここから相談なんだけど
久遠に謝ろうと思うのよね」

「うんうん、そうしなよ」

「許してもらえるかしら……」

「当たって砕けるだよ！」

「砕けちゃ駄目だと思うんだけど……」

優子 side out

ただいま、Aクラスの前に来ています

「し、失礼します、Fクラスの影月だけど、優子はいるかな？」

「木下さん！彼氏が来たよ！」

はずかしいよ！

優子が来ました

「な、なに？」

「ちょっと、話ししない？」

「いいわよ」

ぼくたちは屋上に行った

「「優子（久遠）」」

「えっと、優子からどうぞ」

「久遠から言っていていいわよ？」

「わ、わかった・・・」

ちよつと間を置く

「ふう、優子、昨日はごめんぼくが悪かった！」

ぼくは頭を下げた

「く、久遠・・・」

いいわよ、アタシも謝りたかったし、それと言い過ぎたし」

「ゆ、許してくれるの？」

「アタシが許してほしいくらいよ！」

「・・・・・・」

沈黙が流れた

「「ぷははははは」」

ぼく達は笑いだした

「ぼく達ってなんか似た者同士だよね」

「ええ、そうね」

ぼくと優子は昼休みが終わるまで笑っていた

第二十四問（後書き）

感想待ってます

第二十五問 いざ、強化合宿！

雄二「翔子」

翔子「……隠し事なんてしていない」

雄二「まだ何も言っていないぞ？」

翔子「……誘導尋問は卑怯」

雄二「今度誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。 んで、今背中に隠した物はなんだ？」

翔子「……別に何も」

雄二「翔子、手をつなごう」

翔子「うん」

雄二「よっと……ふむ、MP3プレイヤーか」

翔子「……雄二、酷い……」

雄二「機械オンチのお前がどうしてこんなものを……。何が入ってるんだ？」

翔子「……普通の音楽」

ピッ 《優勝したら結婚しよう。愛している。翔子》

雄二「……………」

翔子「……普通の音楽」

雄二「これは削除して明日返すからな」

翔子「……まだお父さんに聞かせてないのに酷い……。手もつないでくれないし……」

雄二「お父さんってキサマ これをネタに俺を脅迫する気か？」

翔子「……そうじゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらうだけ」

雄二「翔子病院に行こう。 今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

翔子「……子供はまだできてないと思う」

雄二「行くのは精神科だ！ ん？ポケットにも何か隠してないか？」

翔子「……これは大したものじゃない」

雄二「え？、なになに！『私と雄二の子供の名前リスト』か……ち

よっと待てやコラ」

翔子「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせ
たやつ」

雄二「『しょうこ』と『ゆうじ』で『しょうゆ』か……なぜそこを
組み合わせるんだ」

翔子「……きつと味のある子に育つと思う」

雄二「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

翔子「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

雄二「『しょうゆ』って女の名前だったのか……」

明久side

新学年になってから早いもので2カ月がたった

進級して2日で久遠が転校してきたりして、新しい出会いもあった

「あ、秀吉に久遠、木下さんおはよう」

「明久（吉井君）おはよう」

久遠は木下姉妹と幼馴染で姉の優子さんと婚約者の関係にまであつ
ていた

校門をくぐり、下駄箱を開けた

そこには一通の手紙が入っていた

《吉井 明久様へ》

可愛らしい便せんだった

（こ、これはラブレターかな！？）

僕は開封した

内容は・・・

《あなたの秘密を握っています》

「最悪じゃああ！！」

思わず叫んでしまった

「ど、どうしたの（じゃ）！？」

「どうしよ、僕に脅迫文が届いてしまったよ・・・」

僕は凄く落ち込んだが、だが久遠だけは違うかった

「災難ね」木下さん

「内容はどのような物じゃ？」秀吉

「今までの行いが戻ってきたね」

「久遠、心配してよ！」

「はは、ごめんごめん、雄二がいないから流れで言っちゃったよ」

久遠もFクラスに染まってるのかな？

そして、僕はムツツリー二に相談してみた

明久side

久遠side

朝から、面白い展開になってますね

明久が脅迫文か・・・

多分、雄二にもなにかあるかもね

おっとHRが始まりました

久遠 side out

「さて、明日から始まる『強化合宿』だが、大体の事は配ったしおりに書いてあるので確認するように。まあ旅行に行くわけじゃないので、筆記用具と着替えがあれば問題ないが。集合時間と場所は間違えないように」

西村先生のドスの利いた声がFクラスに響き渡る

集合の時間と場所を間違えたらシャレにならないし、他の人の迷惑にもなる

「特に他のクラスと間違えるなよ」

AクラスやBクラスはリムジンバスだったりする

Fクラスは先生が引率するだけかもしれない

「いいか、他と違って我々Fクラスは 現地集合だからな」

『『案内すらねえのかよっ!?!?』』

Fクラスの叫びは学校中に響いたと言う

第二十五問 いざ、強化合宿！（後書き）

かんそー待つてマース

第二十六問（前書き）

いつもより長めです

第二十六問

影月久遠の強化合宿、一日目の日記

『電車を降りると、綺麗な山や畑、田んぼがあたりして、昔の北海道にいたころを思い出しました。

都会の雰囲気も好きだけど、ぼくは綺麗な空気がある田舎が好きです』

教師のコメント

影月君は、この学校に来る前は北海道の田舎の方にいたそうですね。昔の事を思い出せてよかったですね。

あと、なぜ君のような人間がFクラスにいるのかが知りたいです

電車内

車窓を眺めると、だんだん都会の雰囲気から田舎の雰囲気に変わっ

ていた

1時間の移動で物凄く、景色も変わったりしていた

「あと、2時間ぐらいはこのままですね」

明久の正面の姫路さんが捜査していた携帯をポケットにしまった
ちなみに席順は

雄二 須川

秀くん 康太

明久 ぼく

姫路さん 島田さん

そしてそして、心理テストが始まった

Q 緑、オレンジ、青で連想する異性を答えてください

久遠の答え 緑 工藤さん オレンジ 優子 青 優子

美波のコメント 木下さんが羨ましすぎる！

秀吉のコメント 姉上よかったのう

明久の答え 緑 美波 オレンジ 秀吉 青 姫路さん

美波のコメント 怒っていたため、取材班は断念しました

秀吉のコメント なぜ、ワシの名前が挙がるのじゃ！？

こんなふうに楽しんでいました

ぼくは途中で睡魔に負けて寝ちゃったけど

まあ、合宿所についたんだけど・・・

明久が気絶してるし！

しかも、前世の事を懺悔し始めてるし

訳が分からない・・・

明久が目覚るきっかけはAEDだった
どこまで、危険だったの！？

「ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。全く贅沢な学校だよな。この旅館文月学園が買い
取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

へえ、そんなに金持ちなんだこの学校

まあ、注目されてるからそのぐらいは普通かな？

「む、明久、無事じゃったか！良かったのう……。お主がうわ
ごとで前世の罪を懺悔し始めた時はもうだめかと……」

秀くんが入ってきて、胸をなでおろしてますね

明久の生命力はG並みですからね

Gとは、あれだよあれ！黒くてカサカサと言うやつだよ

「心配してくれてありがとう。秀吉も一緒の部屋なんだね？」
「うむ、ムツツリーニも含めた5人一緒じゃ」

見渡すと、8人は寝れそうな部屋

ここに5人とは

問題児をひとつに固めたのかな？

ばく、問題起こしたかな？

・・・・・・・・

起こした記憶がない！！

おっと、康太が帰ってきました
どこに行ってたのかな？

「おかえり、ムツツリーニ」

「・・・・明久、無事で何より」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

まあ、生死の生命線をたどれば、雄二でも心配すると思うけどね

「・・・・情報が無駄にならなくて良かった」

「情報？ああ、昨日俺と明久が頼んでいた奴か。ずいぶん早い」

「・・・・昨日、犯人が使ったと思われる痕跡を見つけた」

「おおっ！さすがムツツリーニだね」

「・・・・手口や使用器具から明久と雄二の件は同一人物の犯行
だと断定できる」

「そうなのか、まあ、こんなことをする奴なんてそんなにいないか
ら断定できるか」

んー、なんでだろ？

ムツツリーニと犯人がいるだけで充分おかしいと思う

「それで、犯人は誰だったの？」

「・・・・（ブルブル）」

「すまない、『犯人は女子生徒でお尻に火傷の跡がある』ことぐらいしか分からなかった

「君は一体何を調べたんだ?」
「ぼくと明久の声が重なった

「……校内に網を張った」

「そう言いながら小さな機械を取り出す康太。あれは……康太がいつも使ってる小型録音機。

「これは?」

「……小型録音機。昨日学校に盗聴器を仕掛けた」

ピツ　　《　　らっしやい》

スイッチを押すとノイズ混じりの声が聞こえてきた。

「随分と音が悪いね」

「校内全てを網羅したのなら仕方ないだろう。音質や制度にこだわる余裕はないからな」

「それにしても『らっしやい』か。声からして女子なのに、八百屋のオッサンみたいに言うんだな」

音が悪い為人物の特定はできないが、女子だということがわかる。

《……雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

こっちは霧島さんだね

「しよ、翔子……! アイツ、もう動いていたのか……!」

「よっぽど早く手にいれたいんだね」

《毎度。二度目だから安くするよ》

《……値段はどうでもいいから、早く》

《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日　　と言いたい

ところだけど、明日からは強化合宿だから引渡しは来週の月曜で》

《……わかった。我慢する》

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが来週の月曜まで伸びたね」

「……………それで、こつちが犯人特定のヒント」

康太が機械を操作する。

《相変わらず凄い腕前だね。でも、このまえ母親にバレてお灸を据えられたんでしょ？よく続けてやれるよね》

《ああ、文字通りお尻にやられたよ。全くいつの時代の罰なんだか。まあ、この程度じゃ乙女の心は止まらないけどね》

《それはまた……バカだね》

《その口調の君に言われたくないね。でも未だに火傷の痕がお尻に残ってるんだよ。なにか早く治すいい方法知ってるかい？》

《知ってるけど教える気はないよ。面倒だしね。自然治癒に任せればいいんじゃないかな？》

《……………その口調でも性格はまるで変わらないんだね？まあ、放っておけばそのうち治るか》

「……………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居かかっていただけ女子なのは間違いないだろうね」

「犯人を特定できる有益な情報だけど、お尻の火傷か……。仮にスカートを捲ってまわつたとしてもわからない可能性があるし、うん……………」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなあ……………」

「流石に身体測定データのなかにも『お尻に火傷の痕がある』って載ってなかったし……………」

真顔で女子のお尻を覗く会話をしている

ぼくは話についていけなかった

「お主ら、さつきから何の話をしておるのじゃ？」

と、今まで側で話を聞いてるだけだった秀吉が声をかけてくる。

「秀吉、実はね

（以下略）」

事情を知らなかった秀くに明久が簡単に説明する。

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは……」

真剣に尻を見る方法を考える人が増えた

「そうだ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。なぜにワシが女子プロに入ることが前提になっておるのじゃ？」

「というか無理だからな明久」

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃからワシは男じゃと」

「しおりの3ページ目を見てみる」

秀吉の言葉を遮って雄二がしおりを明久に放りながら言う。確か3ページ目に書いてあるのは……

「合宿所でも入浴について」

・男子A B Cクラス……	2 0 : 0 0 } 2 1 : 0 0	大浴場（男）
・男子E D Fクラス……	2 1 : 0 0 } 2 2 : 0 0	大浴場（男）
・女子A B Cクラス……	2 0 : 0 0 } 2 1 : 0 0	大浴場（女）
・女子E D Fクラス……	2 1 : 0 0 } 2 2 : 0 0	大浴場（女）
・Fクラス木下秀吉……	2 0 : 0 0 } 2 1 : 0 0	個人風呂？

「……くそっ！これじゃあ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

秀くんはいつも女扱いをうけるよね

ドバン！！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

第二十六問（後書き）

感想待ってます

第二十七問 日常（前書き）

途中から、番外編です

第二十七問 日常

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」
急に部屋のドアが開いて女子が入ってきた

その中には優子や霧島さん、姫路さんに島田さんもいた

女子風呂に盗撮用のカメラがあつたらしい

ぼく達の日ごろの行動から、疑われてもおかしくはなかった

ぼくは、正座をしていた！

「久遠、覗きはダメでしょ！」

「優子、ぼく達は盗撮なんかしてないよ・・・」

大体、優子がいるのに盗撮なんてする意味がないし（小声）
「えっ！？／＼／＼」

「え？聞こえてた！？」

「うっ、うん、そのありがとね

アタシは久遠の事を信じるよ」

「ありがと」

ぼくと優子は正座で向かい合いながら赤面していた

「・・・雄二、盗撮はいけない」

雄二は霧島さんに

「アキ、覚悟しなさいよ!」

明久と康太は拷問を受けていた

「ひどい言いがかりじゃのう」

雄二は下を向いて、怒りを表していた

「上等じゃねえか。あっちがそうくるなら俺らも覗いてやろうぜ!」

雄二は立ち上がり叫ぶ

明久と康太、秀くんも賛同するけど

「みんな、悪いけどぼくは降りるよ」

「な、なんでだ!」

「優子の事は裏切りたくないし・・・」

「あ、そうだったかしゃあねえな

久遠なしで行くぞ!」

時刻は8時となり、雄二達は出て行った

(みんなに悪いことしたなあ)

罪悪感を覚えた

その夜、雄二達は朝に帰ってきた

なんとなくここで久遠の日常

A M 5 : 3 0

起床

「母さん、おはよう」

「おはよう、ご飯できてるから顔洗ってらっしゃい」
「ん、分かった」

A M 5 : 4 5

朝食終了

「ごちそうさま

いつものランニング行ってくるね」

「今日は秀くんはいるの？」

「ううん、ちょっと長い距離走るから、今日は一緒じゃないんだ」
「そう、気をつけてね」

「うん！行つてきます」

A M 6 : 3 0

ランニング終了

「ただいま」

「おかえり」

「さて、朝の勉強でもするかなー」

A M 7 : 3 0

勉強終了

「んー！！終わった」

ぼくは、この時間になると学校に行く準備を終え、歌を聞きます

A M 7 : 4 5

登校

「母さん、行ってくるねー」

「いつてらっしゃい」

A M 8 時

学校到着

「西村先生、おはようございます」

「ん？影月かおはよう」

「重そうですね？」

「ひとつ持ちますよ？」

西村先生は段ボールを3つ抱えていた

「む、すまないな」

「いえいえ」

「ハア」

西村先生がため息をついた

「どうかしましたか？」

「いや、なんでお前みたいなのやつをＦクラスにやったのかなとおもってな」

「ぼくはそれなりに楽しいからいいですよ」

こんな感じで話しながら行きました

8：30

HR開始

「これでHRを終わる」

と西村先生の言葉と同時にFFF団（明久は除く）が出動！
ぼく対FFF団の死合が始まった

「ふう、おわった」

「おつかれさまじゃ」

「あ、秀くんこの人たち日に日に強くなってきてるよー
もう大変だよ」

「そう言いつつまた記録を塗り替えとるじゃろっが」
「まあねー」

その後は何もなかった

12：30

昼食が終わり昼休み

トイレからの帰りし

「あ、あの影月君」

「ん？どうしたの？」

「ほ、放課後後者の裏に来てください！」

そう言って女子生徒は走り去った

昼からの授業

ポカポカと気持ち良い天気なので寝てしまった

放課後

（んー、やっぱり行かないとダメだよね）

「あ、ごめんね遅くなって
話って何かな？」

「わ、私、Cクラスの

山中と言います

影月君の事が好きです付き合ってください」

「気持ちは嬉しいけど、ぼくには優子がいるからね」

「木下さん以上の女になって見せますから！」

「ゴメン、ぼくの中で優子以上の女性なんていないよ……」

「わ、分かりました」

山中さんは泣きながら去って行った

うう、女子の泣って嫌だな

泣かせてるみたいだし……

今月は3人目か
精神的にきつい……

「ただいま」

「あら、お帰りなさい」

読書タイムに入りました

・ ・ ・ ・

「久遠、夕食ができたわよー」

「うん、分かったー」

夕食を食べて、少しゲームをして、ぼくの日常は終わりました

第二十七問 日常（後書き）

感想待ってます

第二十八問（前書き）

作者、病氣にかかっていました・・・

第二十八問

今日が合宿2日目も本格的な合宿となっていて、みんなも真面目に・

・

「…………雄二。一緒に勉強できて嬉しい。」

「待て、翔子。当然のように俺の膝の上に座ろつとするな。Fクラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている。」

真面目に！！取りこんでいた

学習内容は基本は自由で自習だった

「でも、なんで自習なんだろう？ 授業をやってもいいと思つのに。」

「なんで？ 明久は授業のほうが嬉しいの？」

「いや、自習のほうが気が楽でいいよ。やらなくてもいいわけだし。」

すこしはやる気を出そうよ……

「授業なんざやるわけねえだろ、頭を使え馬鹿野郎。」

霧島さんから逃げるように来た雄二が話に入ってくる

明久、お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」
「むっ。失礼な。雄二は理解できないかもしれないけど、僕にとつてはAクラスもFクラスの授業も大差ないよ。」
「両方とも理解出来ないからって言わないよね？」
「そ、そんなことあるわけじゃないか！」
目が泳いでる・・・

「・・・この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから。」
「なるほどね」
「???」

「翔子、それだけじゃ明久には伝わらんぞ。つまりだな、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタルの強化が目的だから、授業はさして問題じゃないということだ。」

霧島さんの説明に補足を入れる
息びったりだし

雄二が卒業したら即結婚かな？

「あ、代表ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？
この声は工藤さんだったかな？」

「えっと、工藤さんだっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？ 久しぶり。」

そっちの君はたしか優子の彼氏の影月君だね」

「はるかしいから止めてほしい／＼」

平然と何を言い出すんだ

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらっね。Aクラスの工藤愛子です。得意な教科は保健体育の“実技”。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物シュークリームだよ。」

特技のところはスルーしておこう

「ん？どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、その……」

「あ、さては疑ってるね？ なんなら、ここで披露してみせようか？」

女子がする会話ではないと思う……

工藤は自分のスカートの裾を摘んでみせた。

「あれ？ ムツツリーニは随分と冷静だね。僕でもこんなにドキドキしているんだから、とつくに鼻血の海に沈んでるのかと思ってたのに。」

鼻血の海って聞いたことがないよ……

「……ヤツは、スパッツを穿いている！」

「な、なんだって！？ 工藤さん、僕を騙したね！？」

「いやあ、そこまで残念がらなくていいと思うよ？」

それより可哀想なのは雄二だと思うけど……」

「うん、たしかにそうだね」

雄二は霧島さんに目を突かれていた

「影月君は優子のパンチラの方がいいの？」

「げふつ、いきなり何を言い出すんだよ！？ / / /」

「ああ、図星か。まあ付き合ってるし当たり前か」

この子、油断できないね

「昨日は、優子に影月君の事いろいろ聞いたよ

頬を赤くしながら、話してたよ」

「……優子、楽しそうだった」

「昨日、何あったの！？」

「昨日の話聞いてたら、優子が惚れる理由もわかつちやったよー」
恥ずかしい

非常に恥ずかしい！

「あ、そうそう最近これにこってるかな？」

そう言いながら彼女が取り出したのは………小型録音機！？

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば」

小型録音機をカチカチと弄る工藤。

少し間を置いて、内蔵されてるスピーカーから音声が届いてきた。

ピッ 《工藤さん》 《僕》 《こんなにドキドキしてるんだ》
《やららない？》

「わああああつ！ 僕はこんなこと言っていないよ！？ 変なものを再生しないでよ！」

「ね？ 面白いでしょ？」

工藤さんが悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「……………ええ。最つつ高に面白いわ。」

「……………本当に、面白い台詞ですね。」

ゾクッ！

鳥肌が立つほどの殺意を感じた。

「瑞希。ちょっとアレを取りに行くの手伝ってもらえる？」

「わかりました。アレですね？ 喜んでお手伝いします。」

その後戻ってきた姫路さん、島田さんの拷問は西村先生が戻ってくるまで続いていた

K、K君の感想

明久が可哀想でした

Y、S君の感想

目が痛すぎる

K、T君の感想

・・・俺ならもっとうまくやれれる

H、Kさん？の感想

ワシは男じゃ！

いつも通りじゃった

第二十八問（後書き）

感想待っています

ああああああああああああああああああああああ

第二十九問

地獄のような勉強会、天国のような夕食が終わり、各自部屋に戻っていた

「久遠、頼むから来てくれ。」

「ぼくも協力はしたいけど、後の優子が怖いからね」

「頑張れば木下の裸姿が見れるかもしれないんだぞ？」

「優子の裸？……（プシューーーーーー）」

「……久遠が処理落ちした！？」「」「」

明久side

久遠が木下さんの裸姿を想像しただけで処理落ちしてそのまま、布団に寝かせてあげた

「わりい、まさかここまでなるとは思わなかった」

「わしもじゃ。まさか想像だけで気絶するとはのう」

雄二が謝り、秀吉が想像を越えたとつぶやいていた

「坂本、俺たちに話って何だ？」

部屋に入ってきたのは須川君をはじめとした、Fクラスのメンツだった

「よく来てくれた。皆に提案がある」

部屋に入りきれていない、メンバーに聞こえるように雄二が言った
『提案？』

『今度は何だよ。こっちは疲れてるんだよ』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

全員がだるそうにしている

そんなことに焦りもせず、雄二はつづけた

「みんな覗きに興味はないか？」

『『『くわしく聞かせろ！』』』

雄二の言葉に結束を見せるFクラス

説明の後、僕達は戦力の補強を完了し、風呂場へと進軍した

明久side out

「西村先生。流石に今日は現れないのではないのですか？昨日あれだけ指導しましたし」

「布施先生、あのクラスは影月以外は生粋のバカです。今日も絶対現れます」

「そうでしょうか？いくらなんでもそこまでバカでは　あ、あれはなんだ！？」

ドドドドドド！！

大きな足音と共にFクラスが登場してくる

彼らは叫びながら進軍していた

「に、西村先生大変です！変態が編隊を組んできました！」

「まさか、懲りるところか数を増やしてくるとは。これだからあの連中は・・・布施先生警備部隊に連絡を。私は定位置に着きます

！」

「は、はい！」

今日も教師部隊対Fクラスの戦争が始まった

明久side

僕達は部隊をわけて進軍し、各班1つずつ教師又は女子生徒にぶつけ、主軍はどんどん進軍して行った

「そこまでです。薄汚い豚共！この先は男子禁制の場所！おとなしく引き返しなさい！」

「し、清水さん！？とその他多数」

「吉井、数も質もこっちが不利だ！」

誰かが弱音を吐く

「清水さん、お願いだ！そこをどいてほしい」

「ダメです！お姉さまのペッタンコを堪能しようなんて、神が許しても美春が許しません！」

立ちはだかる清水さん

だが、美波に興味ないのになー

「違うよ！僕の目的は美波のペッタンコなんかじゃないんだ！信じて！」

「ウソです！お姉さまのペッタンコに興味がない男なんていません！」

「本当だよ！ペッタンコはしょせんペッタンコなんだ！今の僕は地平線のようなペッタンコより大事なことが右ひじがねじれる様に痛iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

「黙っていれば人の事をペッタンコペッタンコと何度も！！」
言い争いに夢中で美波が近づいているのに気がつかなかった

ホントやばい！痛すぎる！！

「ヤッホー 吉井君。何を見に来たのかな？ボクを覗いてくれるならうれしいけど」

次々と登場する女子たち

「久遠、おとなしくしなさい！」

その中に久遠を呼ぶ木下さんがいた

「ああ、木下」

「何よ？」

雄二が罰を悪そうに言う

「久遠を誘ったんだこう言ってな『木下の裸が見れるかもしれない』って言ったら処理落ちして気絶した」

「「「「「.....」」」」」

沈黙が走った

「久遠はどうしてるの？」

「部屋で寝てる」

「分かったわ、行ってくる」

木下さんはそう言って僕達の部屋に向かった

その後は、言うまでもなく作戦は失敗またもや補習室に入れられた

久遠 side

ぼくが目を覚ますと優子が近くにいた

「えっと？優子？」

「どうしたの？」

「なんでここにいるの？」

素直に思った。時刻は9時で入浴時間は終わっているが雄二達がい
ないことを考えるとまた失敗らしい

「あんたが気絶してるって聞いて来てみたの」

「えっと、理由は聞いちゃった？」

「うん」

おそらく僕は耳まで赤くなっているだろう

優子は頬が少し赤いだけだった

「・・・・・・・・」

沈黙が流れた

その後は優子に「なんで、想像だけで気絶するのよ」って笑われな
が言われた

ぼくは沈黙を貫くしかなかった……

「優子、頼みがあるんだけど」

「雄二達に力を貸してもいい？」

質問の後サブミッションに掛けられました

後で、理由を言ったら納得してくれたけど……

久遠 side out

第二十九問（後書き）

そろそろ、無理かも・・・

第三十問

「あ、西村先生おはようございます」

「ん？影月か、おはよう。」

「どこへ行くのだ？」

「日課のランニングです。」

「あ、でも行ってきた方がいいのでしょうか？」

「普通は、ダメだがお前なら別に問題ないだろう」

「有難うございます」

「気をつけるんだぞ」

「はい」

一礼して外に出た

そして、いつもよりは短いけどランニングをした帰ってきた

「寝落ちかよチクショー！」

とゆう明久の叫びが聞こえた後に

「殺す！こいつの耳からどす黒い血が出るまで殴り続ける！！」

何やってんだろう・・・

ぼくは寢室のドアを開くと

明久が花瓶を持っていてそれを止めてる秀くんがいた

「・・・何やってんの？」

「ん？ああ、久遠かどこに行ってたの？」

花瓶を下してぼくに問う

「日課のランニングだよ。部活なにもやってないからね

筋肉だけは維持できるようにしておかないと」

「む、ワシも行っておきたかったのじゃ」

「はは、ごめんね気持ちよさそうに寝てたから」

「別にいいのじゃ」

ぼくたちは着替えて、朝食を食べに行った

「雄二。そういえば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん？なんだ？」

ぼくたちは食堂に移動して、朝食をとる

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つかったないカメラが一台残っている』って言われたよ」

「なんだと？」

忙しなく動いていた雄二の箸の動きが止まる。

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やっぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「いや、そうとは限らんじやろ。それならわざわざ怪しまれるようなことを言うとは思えん」

雄二に代わって隣にいる秀吉が答える。確かに工藤が犯人だと断定するには証拠が少なすぎる。

「……………確認するしかない」

「やっぱりそれしかないか……………」

この人たちには覗きとゆう方法しかないのかな？

「だが、工藤の情報はありがたいぞ」

「え？カメラが残っているってことが？」

「ああ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女子の確認もできるからな」

「……………隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

自慢げに言うことじゃない……

「けど、本当にそんなカメラがあるのかも怪しいよ？」

「違うよ。最初にカメラが見つかること自体がおかしいんだ」

「そうだ。あんなに盗撮や盗聴に長けている犯人のカメラが素人に見つけられるなんて考えにくい。そうなる」と

「……………二段構え」

「最初のものはカモフラージュとゆうことになるね」

「用意周到じゃな」

最初のカメラで油断さし、本命のカメラで撮影か・・・
手の込んだことをするね

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りに行けば解決
つてことだね」

「……………それは無理」

「え？なんで？」

「……………時間外だと脱衣所は嚴重に施錠されている」
初日のカメラだね。そんなことになってるんだ

「諦めて今までどおりの方法を貫けつてことが……………」

「そのようじゃな」

明久曰く、女子が守りに回ってたみたい

「……………敵側に工藤愛子もいた」

工藤さんも守りがわか。Aクラスに守られるときついね

「そうだ。昨日の敗因はAクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されて
いたことだ」

「ぼくたちも増やすんだよね？」

「その通りだ。お前はどこかのバカと違って頭の回転が速くて助かる」

時間は飛び、VS教師軍団第三回戦が始まった

第三十問（後書き）

合宿編が終われば、オリ話を入れて終わりにしようと思います。

続ける可能性もゼロではありません・・・

第三十一問（前書き）

なぜこうなった・・・

第三十一問

結局、手を貸してくれるのは、EクラスとDクラスだけだった。
Cクラスは代表が小山さんだし、Bクラスは根本君だからまつまりがない

明久はAクラスの久保君を説得に向かったけどダメだった。

時刻は20:00

「そろそろ、時間だからいこっか」

ぼくたちが立ちあがったところに須川君が飛び込んできた

「吉井大変だ!」

「須川君どうしたの? 作戦開始までまだ時間はあるけど」

「やられた。大食堂に待ち伏せされていた! そして、戦力は分断されている!」

「な、なんだって!?!」

「雄二、霧島さんすごく怒ってると思うよ?」

「あ、ああまさかばれるとは思ってなかった・・・」

「相手は雄二の事を大好きな霧島さんだから考えてることが分かったんだと思うよ」

「雄二! どうするのさ!?!」

「じゃあねえ、出陣だ!」

「了解!」

部屋を駆け出し、大浴場へと向かう途中「優子たん。はあはあ」と
か言ってる輩がいたのでボコボコにしておいた。

敵陣を抜け駆けそして大浴場のある一回に着いたが

「雄二、来るのを待っていた」

雄二の嫁、姫路さん、優子に工藤さん。高橋先生までいた

「翔子、やってくれたな」

雄二の歯ぎしりが聞こえる

これは悔しいだろう

とつさの判断で向かった先に一番厄介な相手がいたのだから・・・

「ぼくは、高橋先生と優子とやるよ。」

ちようど、2人とやってみたかったし」

「へえ、久遠やる気あるのね？」

「影月君、君には失望しました」

2人の言葉を軽く無視した

「雄二、明久行きなよ」

「「わかった」」

「させません！」

「おつとここからはワシらFクラスが相手じゃ！」

秀くんとFクラスみんなが駆け付けた

「・・・工藤愛子勝負」

「ムツツリー二君負けないよ？」

康太と工藤さんが勝負する

「二人してかかってきなよ!!」

『Fクラス	影月久遠	総合科目	17048点
高橋女史	総合科目	7791点	
Aクラス	木下優子	総合科目	4185点

ぼくVS高橋先生、優子の勝負が始まった

第三十二問

『Fクラス 影月久遠 総合科目 17048点
高橋女史 総合科目 7791点
Aクラス 木下優子 総合科目 4185点』

「……驚きすぎて、声も出ないわ」

キンキンガンキン！

「あはは、なんか頑張ったらとれたんだよねー」

「生徒に負けた……」

ぼくと優子は切り合いをしてるけど、高橋先生はorz状態だった

ぼくは構えを解き、戦う意思がないことを優子に表した。

「ちよ、久遠！？」

何やってるのよー！！」

「(チョンチョン)」

ぼくは優子の後ろを指さした

優子の後ろには鉄人や霧島さんに姫路さんそして多数の教師人と土

下座しているFクラスのメンツ
雄二、明久は立ってるけど・・・

『『『』』』すいませんでしたー！！』』』』

「優子、ぼくも補習室に行ってくる」

「大変ね・・・」

「まあ、明日もあるしねー。

優子と高橋先生との勝負楽しみにしてるから」

「アタシも楽しみだわ！」

優子に背を向け、補習室に行った

補習室にて・・・

「ハア、影月。」

「なんでしよう？」

鉄人は溜息を吐きながらぼくの名前を呼んだ

「お前まで、参加するとは思ってなかったぞ」

「ぼくは、優子と高橋先生と勝負をしたいだけですから」

「お前はいつから戦闘狂になったんだ」

「そんなんじゃないですよ」

夜中まで補習はつづいた

第三十三問（前書き）

めっちゃ更新遅れたorz
しかもぐだぐだorz

第三十三問

盗撮犯を見つけるチャンスも後1回となり

日に日に戦争は拡大して行き、今日は本当の意味で男子対女子＋教師が行われようとしていた。

優子が西村先生に掛けあってくれて、ぼくは無罪みたいな感じになっている

夜

「雄二、AクラスとBクラスは勧誘できた？」

「Bクラスは大丈夫だが、Aクラスは分からない」

「そっか、でも、最後だから見つけないとね……。雄二はそのまま結婚すればいいと思うけど」

「久遠！聞こえてるぞ！」

「なんのことかなー」

まあ、いつも通りの時間だった

「うし！行くぞー！」

「うんー！！」

しゅっぱーっ

3F

女子はEクラス男子はDクラスの面々だった

ぼくたちはそこを通り2Fへ進軍した

2F

そこには優子のことを思い浮かべている変態がいた

『優子たん。はあはあ』

「……………」

「……………（ゾクッ！！、やばい久遠が切れた！）……………」

ザシュ！！

なぜか、腕輪を使い

変態×5を瞬殺し、次いでに相手をしていた、女子生徒も倒した

「……………（……………点数の無駄使い！！）……………」

階段前

そこには優子と高橋先生が立っていた

「みんな、先に行って」

「で、でも久遠！」

「……………行くぞ、明久

久遠、後から追い付けよ」

「もちろんだよ」

皆は1Fに向かった

優子と高橋先生は道を開けて明久達を通した

「さあ、始めようか！！」

「……………サモン！……………」

『Fクラス	影月久遠	総合科目	16548点
高橋女史	総合科目	7791点	

Aクラス	木下優子	総合科目	4185点
------	------	------	-------

「ねえ」

「な、何かな？」

「なんで、昨日より点数が減ってんのよ！」

「変態を蹴散らしてきたから！」

「あ、そうなんだ」

なんか無駄に納得された

この学園変態多いからね

「始めようぜ！」

集中Ver（目は閉じてないが口調が変わる）

優子と高橋女史の連携は凄かったが久遠の点数と操作技術で一進一退を繰り返した

「はあああ！！！」

優子がランスで突っ込んでくる

俺はそれを避けると後ろから高橋女史の鞭がきた
それを飛んで避け、召喚獣の体が逆さに向きながら、サブマシンガンで2人に打つ

ようはバクテンをしながら銃を打つ感覚。

その攻撃はかすれる程度だった

『Fクラス 影月久遠 総合科目 16418点

高橋女史 総合科目 7728点

Aクラス 木下優子 総合科目 4101点』

「影月君はそんな態勢でよく打てますね!？」

「明久との特訓の成果っすよ」

「どんな、特訓をしたのか知りたいわ・・・」

バンッバンッキンッパシッ

10分ぐらいの戦い

お互いの点数は半分になっていた。

「久遠、強いわね」

「それは、優子もだろうが」

『Fクラス 影月久遠 総合科目 8266点

高橋女史 総合科目 3890点

Aクラス 木下優子 総合科目 2100点』

高橋女史の集中力が薄れていた

俺はそれを見逃さなかった

グサッ！！

高橋女史に腕輪の能力を使い。心臓付近を刺したとおもった

高橋女史は辛うじて急所を外した。

そして、鞭を振るいまともに当たってしまった

『Fクラス 影月久遠 総合科目 4206点

高橋女史 総合科目 1790点

Aクラス 木下優子 総合科目 2100点』

ほぼ一緒の点数になっていた

「こりゃ、同じ点数だったら、俺は死んでるなー！」

「2対1だから仕方ないんじゃないの！」

太刀VSランス

打ちあいながら会話している

『Fクラス 影月久遠 総合科目 3790点

高橋女史 総合科目 1790点

Aクラス 木下優子 総合科目 1804点』

「そろそろ、最後にすつか！

時間もねえしな！！」

マシンガンを捨て、太刀だけを構える

優子と女史もそれにあわせて、今日一番の顔をしていた

ガチン！！
3つの音が重なった

第三十三問（後書き）

久遠はどうやって、2人を切ろうとしているのでしょうか？

第三十四問

ガチン！！

3つの音が重なり、

1人だけ立っていた

『Fクラス 影月久遠 総合科目 38点
高橋女史 総合科目 0点

Aクラス 木下優子 総合科目 0点
』

久遠だった

久遠は、まず高橋女史の胴体を腕輪のチカラで切断。
その後、優子も切っていた

2人の攻撃を受けながらも残っていた久遠は奇跡だった・・・

「はぁ、負けね。これで1勝1敗かぁ」

「そうだね。またやろうね」

「そうね」

「影月君は強いですね。」

まさか、生徒に負けるとは思いませんでした。点数の面でも・・・

「

「あはは、なんか、必死で早く書く練習をやってたらとれたんですよ
自分でもびつくりです」

「また、勝負してもらえますか？」

「ええ、喜んでお受けします」

ぼくたちはお互いに握手を交わした

その時、

『『『わりに、あわねー！！！！！！！！！！』』』』

明久達は女子たちに勝ったみたいだけど何かあったのかな？

「影月君は行かないんですか？」

「ぼくは、2人と戦いたかっただけですからね。」

覗きには興味ありませんから」

「木下さんがいるからですか？」
「そ、それはー／／／」

高橋先生に弄られた

その後、2年生全員は停学処分となった

ぼくのは西村先生が掛けあってくれたみたいだけど
学園長がものすごく怒っていて、許されなかったらしい

停学4日目

信じられないことが起こった

母さんが重い病気にかかった。

母さんはアメリカの病院で手術を受けることになり、明日にでも病院のへりで向かうことになった

ぼくは、その4日後にアメリカに行くこととなった。

第三十四問（後書き）

後、3話ぐらいで完結です

第三十五問 『サヨナラ』は言わない(前書き)

第三十五問 『サヨナラ』は言わない

「優子、今から家に行っていていいかな？」

『いいけど、急にどうしたのよ？』

「行ってから話すよ」

「分かったわ」

優子 side

突然、久遠から電話が入り、家に行っていていいか？って元気のない声で言ってきた

何かあったのかしら？

優子 side out

ピンポーン

「あ、久遠上がって」

「うん、おじゃまします」

廊下を歩きリビングに着いた

「優子、秀くんとおばさん呼んできてくれるかな？」

「え？うん、分かった」

優子は2階に上がっていった

「話ってなんなの？」

「うん、母さんがね、重い病氣にかかったんだ」

「えっ！？」

「・・・それで？」

優子と秀くんは驚いていた

優子のお母さんは驚いていたけど、話を最後まで黙って聞くんもりらしい

「うん、今は、アメリカの病院で手術中だと思う。

ぼくも火曜日にはアメリカに行く」

「・・・」

三人は黙ってしまった

「久遠・・・」

久遠のお母さんと元気で帰ってきなさいよ！！」

「うむ、また、一緒に旅行に行くのじゃ！」

「そうね、また、あなた達と会えることを楽しみにしてるからね。だから、1人で帰ってきちゃダメよ？」

「うん、みんなありがとう

それじゃ、僕は帰るね

また、学校で」

「じゃあね（のう）」

家に帰った

優子 side

「優子、良く我慢したわね」

「だって、ヒク今泣いたらヒク久遠が行かないじゃない」

また、久遠と放れることによってアタシは涙を流していた

「そう、じゃあ、今はいっぱい泣いて、久遠ちゃんが帰ってくる頃には笑顔がいられるようにならないとね

隣でも秀吉が泣いていた

まるで、昔のあの時みたいだった

その後一晩中アタシは泣いた

優子 side out

月曜日

「失礼します」

「入りな」

ぼくは学園長室に来ていた。

「何でしょうか？」

「アメリカに行くのかね？」

「ええ、母さんが病気ですから

明日にでも行きます」

「だったら、仲が良かった

AクラスやFクラスに別れの言葉ぐらい言つときな
時間は取つてあるから」

「なんでですか？」

「土曜日にアンタから電話かかった時に

今日、授業する先生方がわざわざ開けてくれた」

「そうですか・・・

有り難く、時間を使わせてもらいますね」

「ふん、用件はそれだけさね」

「では、失礼します」

ぼくは重い足取りでFクラスへ向かった

Fクラス前

「すいません、遅れました」

「ちょうどよかった、影月。

クラスの奴らには俺から話しておいた。後はお前の言葉だけだ。」

「はい」

ぼくは一人一人にお礼を述べたりしていた

「西村先生、短い間でしたがお世話になりました
いつも、元気で凄かったです」

「影月、お前のような生徒はあまりいなかった

尊敬できるところだ

その心を忘れるなよ」

2年Fクラスの担任西村先生

最後は仲の良かった明久達

「康太、短い間だけど、ありがとね」

「・・・・・・また、帰ってこい」

「うん」

ムツツリーニこと康太

「島田さん、いつも元気だったね

いつも、楽しかったよ

それと、頑張ってたね」

「ありがとね、影月、ウチもあんたと入れてよかった」
ツンデレ娘の島田さん

「姫路さん、初めてみた時、君がFクラスだって信じられなかったよ
でも、振り分け試験の時に明久に助けてもらって良かったね

あと、島田さんと一緒に頑張ってたね」

「はい、影月君、元気で

優子ちゃんも待ってますから

また、会いましょう」

天然少女の姫路さん

「雄二、君の奇策にはいつもびっくりさされたよ

あと、ぼくが転校してきた頃、最初に話しかけてくれてありがと
う」

「寂しくなるな」

ま、俺はお前の事は忘れても絶対思い出す
そんぐらい、お前はでかい存在だった。

ありがとな」

元神童の雄二

「明久、いつも、バカやって楽しそうだったね

そんな、君を見てぼくも楽しかったよ

あと、恋愛には鋭くなるうね」

「ハハ、分かったよ

元気でね。

久遠と遊んだ日々、忘れないから」

バカ代表の明久

「秀くん、ぼくの最初の友達は優子と3人だったね。

大分前の事が昨日のように思うよ。すごく楽しかったよ

あと、演劇頑張ってたね

いつも、一緒に練習してて楽しかったよ

勉強も両立して、来年はAクラスに入りなよ。」

「さみしくなるのう

久遠と、いると、退屈しなかったのじゃ

いつも、演劇の練習を付き合ってくれてありがとう

お主のおかげで、自分の気付けなかったことを言ってくれたのう

またな、親友！」

ぼくの大親友の秀吉

ぼくは、一人一人に挨拶を言い、Aクラスに向かった

「失礼します。」

Aクラスの扉を開けると、高橋先生から話があったのか、みんな驚いてこつちを向いていた

「影月君、早速ですがお願いします」

「母さんが重い病気にかかり、明日アメリカに行きます。

最後に仲良くさせてもらったAクラスの人たちに感謝の言葉を言いたかったのでこの場を借りて言わせてもらいます。」

Fクラスの時と同じように一人一人に気持ちを伝えて行く

残るは三人

「工藤さん、君はいつも元気だったね。

後、下ネタは少し自重した方がいいよ」

「あははー、これがボクだからねえ

影月君も向こうで頑張ってるね」

ボーイツシュ少女の工藤さん

「雄二は素直じゃないから、苦労すると思うけど、雄二は絶対霧島さんの事が好きだからね

がんばりなよ？」

「……寂しくなる。

影月はいいい人だからアメリカでも大丈夫。頑張ってる学年主席、雄二の嫁の霧島さん

「優子、今まで僕のそばにいてくれてありがとう。

それと、『サヨナラ』は言わない。

また、母さんと一緒に帰ってくるから。」

「うん、また元気な顔見せてね。

久遠は約束を破らないから、ずっと信じてる」
最愛の人の優子

ぼくは大切な人たちに見送られながら、日本を旅立った

第三十五問 『サヨナラ』は言わない（後書き）

感想など待ってます

第三十六問 帰還（前書き）

久遠がかえってきましたー

第三十六問 帰還

1年後 夏

「久しぶりだな」

あの日から一年と1カ月ぐらい過ぎて、ぼくと母さんは帰ってきた
母さんの病気も完治した。

「そうねえ、久遠には迷惑をかけてごめんね」

「ううん、大丈夫だよ。」

それにまた母さんと帰ってこれてよかったよ」

「あ、そうだ」

久遠、文月に転入にしておいたわ」

「ホント!？」

「ありがとう」

ぼくの転入先も文月学園となった

「明日から行けることになってるから」

「うん、分かった」

翌日

明久side

「ねえ、雄二」

「なんだ？」

「あれから一年以上経つんだね
久遠、元気にしてるかな？」

「あいつの事だからうまくやってんだろ。
メールこねえのか？」

「全然、こないよ」

秀吉も雄二の作戦の時に携帯壊してからは、買っていないって言うし」

「ふうん、ま、大丈夫だろ」

朝の時間で僕と雄二は一年前にいなくなった友人の事を話していた

キンコーンカーン

チャイムから遅れること5分、鉄人が入ってきた

「突然だが転校生だ
入ってこい」

「はい」

なんか聞いたことあるような声だった

そして、ドアを開けて入ってきたのは
久遠だった

明久 side out

時間は少しさかのぼり

「うわぁ、久しぶりだなー」

「影月、久しぶりだな」

前には西村先生がいた

「お久しぶりです。」

元気でしたか？」

「胃潰瘍にかかるかと思ったぞ」

「あははー」

苦笑いしかできなかった

「ぼくってまたFクラスですか？」

「いや、学園長がお前だからAクラスでいいと言ってな

お前はAクラスだ」

「誰がいますか？」

「お前の知り合い全員だ」

「明久達もですか!？」

「ああ、あのバカ達もAクラスになるため、必死に勉強したらしい
おかげで俺はAクラスの副担任になった。」

話を聞く限り、Aクラスは明久、雄二に康太、秀くんもいるらしい
みんながんばったんだね

「立ち話をしすぎたな、Aクラスに行くか」
「はい」

Aクラスへと向かった

「入れ」

「はい」

Aクラスに入った

そこには見知った顔がたくさんいた

木下姉弟、明久、雄二、康太、霧島さん、姫路さん、島田さん、工藤さん

「久遠（影月（君））」
みんなが声を上げた

「影月、挨拶を頼む」

「はい、えっと、みんな久しぶり

影月久遠です。あと少しの間だけどうぞしく」

優子の口がぽかんと開いていた。

ぼくの席は優子の後ろだった

最終問題

休み時間

「「「「「「「「「久遠（影月（君））！！」」」」」」」」」

「な、
なにかな？」

いつ

「かえつて」

「きたのじゃ？」

連携をとった3人

上から雄二、明久、秀くん

「えっと、昨日帰ってきたよ」

「……なんで連絡入れなかった？」

これは康太

「忘れてた」

「帰ってくるなら帰ってくるって言いなさいよ（言うてください）！！」

島田さんと姫路さん

そこまで怒らなくていいと思うよ

「あははー、影月君も大変だね」

「優子も大変」

劳いの言葉有難うございます。

「久遠！」

「は、はい！！！！？」

突然優子に大声で呼ばれびっくりした

「帰ってくるなら言つてよー！」

空港に迎えに行つたのに！！」

「そこはほら！」

驚かしたくない？」

「「「「いや、絶対にならない」「」「」

全員に否定されました

「まあ、とりあえず

久遠、おかえりなさい」

「うん！ただいま」

こうして、ぼく達はまた進み始めた

毎日が楽しくて

時が進むのは早かった

もし、生まれてくる頃が違つかったら、君達と話すことはなかった
だろう

もし、ぼくが君たちと会えてなかったら今のように笑えてなかった
だろう

もし、誰かが欠けていたらみんなと会えていなかっただろう

もし、ぼくの大切な親友がいなかったら、ぼくは友達は少なかった
だろう

もし、ぼくの大切な彼女がいなかったら・・・・・・

だろう

この世界は凄くつまらないもの

ぼくと友達、親友、彼女を出会わせてくれた
神様に改めて感謝できます

く完く

最終問題（後書き）

ついに終わりました

ご愛読ありがとうございました

まだ連載している方もよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3049w/>

ぼくとFクラスと召喚獣

2011年11月7日19時14分発行